さへ一人出してゐる、五分々々の仲裁では納まりやう筈がないから
與力同心は兩方を押へた後に米友を番小屋の方へつれて來ました。
さてその後の裁判が振つてゐます。
米友に槍で突かれた人足は一人、それは面を突き破られたゝけで、
可なり重い傷には違ひないけれど生命に別條はない。だから其れを
償ふ爲に米友を片輪にしたら承知が出來るだらう。併し米友は跛足
であつてもう片輪になつてゐる。この上に片輪にしてしまつては命
を縮める事になるから、その代りに頭を坊主にして其で許してやれ
といふ駒井能登守の裁判でした。
能登守も笑ひながら裁判しました。與力同心も笑ひながら、
『それは御名案、どうじや川越共それで許してやれ〳〵、相手は此
の通りの正直者だから』

與力同心が斯ういふと、ハラ〳〵してゐた宿役人共も亦笑ひ出して
『御支配樣のお裁判だ、この男を坊主にして笑つてやれ若い衆、そ
れで我慢して呉れ〳〵』
八方から斯う云はれて、さすがの川越人足も納まりかけました。
『あはゝゝ、この野郎を坊主にしたらドンナ坊主が出來上るだ、
見た處餓鬼のやうでもあるし、馬鹿に年寄染た處もあるし、何だか
異體のわからねえ野郎とつちやあいゝから坊主にして笑つてやれ』
『坊主、坊主』
早くも番小屋から怪しげな剃刀だの鏡臺だのが擔ぎ出されます。
米友は詰まらない面をしてゐます。俺を坊主にするなどゝは以ての
外だといふやうな面をしてゐたが、トテも坊主になるものなら大人
しく坊主になつてやらうといふやうな得心をしたやうにも見られま

す。

物好きな宿役人が米友の後へ廻つて剃刀を取つたが其の剃刀が餘り切れないせいか、山葵卸で擦るやうでありました。痛さを怺へて凝として剃らせてゐる米友、その面も可笑しいが、いよ〳〵剃上がつた坊主も可成おかしいと見えて一同で、やんやと囃して笑つたけれど米友は笑はなかつた。

『これで宜いのか』

坊主頭を振つて見て、それから例の風呂敷包みを首根つ子へ結びつけて、笠を被ると、

『俺等は急ぎなんだ』

斯う云つて横つ飛びに川の中へ飛び込んでしまひました。その擧動が、あんまり無邪氣で輕快でしたから、人足共も笑つて米友が、ひ

とりでズン〳〵川を越て行くのを敢て止めませんでした。

この一場の小喜劇がこれで濟んで、川彼方を跛足を引き〳〵駈て行く米友の形を散々に笑ひながら漸く能登守一行の川渡りが濟みました。しばらく遠慮をしてゐた兩岸の旅客も漸く渡ることが出來ました。

『いや旅をすると樣々の面白いものを見るわい、駒木野の關所で見た女、次に小佛を下りて見かけた足の早い男、今またあの奇妙な小男、さて此の次には何を見るか、それにしてもあの小男が槍を使ふのは至極の精妙、見た處、武家奉公をしてゐるやうな容子もなし、出し抜かれた〳〵と云つて駈て行くが、あの調子ではまた何かに打かつて大事を惹き起さねばよいが』

駒井能登守は斯う云つて米友の身の上を心配しながら、やはり悠々

として甲州入りの旅をつゞけましたが、程なく烏澤の宿へ着いて此處の本陣で一休み。

三

烏澤で休んでゐるうちに、また様々の雑談がありました。この附近で香魚が捕れて其の味が至極よろしい事、また山葵も取れる事、矢坪坂の古戦場といふのがある事、太鼓岩、蠶岩、白糸瀧、長瀧などの名所があるといふ事、それから矢坪坂の座頭轉がしの難所の事になつて、

『房州の小湊へ行く道にお仙轉がしといふのがあるが、此處には座頭轉がしといふのがある。座頭轉がしとは何か由緒がありさうな名じや、如何いふわけで、そんな名前がついたのだ』

本陣の主人が答へて、

『たゞ山の中腹に開いてあります路が羊の腸みたやうにうねつて居りますから、煙草の火の借り合ひが出來るほどの處へ行くにも廻り廻つて行かねばなりません、或時二人の座頭が此の道を通りまする時お互に言葉をかけ合つて參りましたが、途中で後の者が「オーイ」と申します、前のものが「オーイ」と返事をします、近い處に聞えたものですから、眞直に行くと谷へ落ちて死んでしまひました、それで座頭轉がしといふのださうでございます』

『この街道は道が嶮しいばかりでなく、人氣なども中々荒いやうじや』

『人氣も中々荒いさうでございます、どうも郡内者といつて旅の者

が怖れておゐでなさるさうでございますが、住んで居ますれば、やつぱり同じ人間でございますから、そんなに荒つぽいとも存じません、頼むと後へ引かないと云つたやうな片意地の處もございして、附き合ひやう一つでございます』

『この鳥澤に糸といふ者があるか、鳥澤の糸といつて、この界隈に知られた男があるさうな』

『へえ、鳥澤の糸、そんな者があるにはあるでございますが、お話を申上げるやうな人體ではございません』

と云つて、主人は鳥澤の糸の事をあんまり話したがらない。風景があつたり名物が出たりすることは多少の自慢にもなるけれど、あんな人間の存在することは、あまり名譽とも思はないらしくて糸の事は問はれても語らずに、

『何しても、此の通りの山の中でございますから、景色と申しても名物と申しても知れたものでございますが、そのうちでも甲斐絹と猿橋、これがまあ可成り日本中へ知れ渡つたものでございまする』

『さうだ、猿橋と甲斐絹の名は知らぬ者はあるまい、その猿橋ももう近くなつた筈』

『これから、ほんの僅でございます、そんなに大きな橋ではございませんが組立が變つて居りますから、日本の三奇橋の一つだなんぞと云はれて居りまする、猿橋から大月、大月には岩殿山の麓あたりがございまして富士へおゐでになるには其處から別れる道がございます、それから初狩、黒野田を通つて笹子峠』

本陣の主人は一通りの道案内を申しました。一行のうちには此處を屢通つたものもあるのだから、そんなに委しく云ふ必要はないと

思つて手短に案内をしたが、大部分は初めての甲州入りだから、珍らしがつて名所の話をします。殊に日本三奇橋の一と稱せらるゝ猿橋に近くなつたといふ事が好奇心を嗾つて、

『一體、その日本の三奇橋といふのはドレとドレだ』

『周防の錦帶橋、木曾の桟橋、それに此の甲斐の猿橋』

一行のうちの物識が答へます。やがて此の本陣を出て右の猿橋へかゝつた時分に、そこで一行は、橋以外にまた奇體なものに打着かる事になりました。

鳥澤で休んで駒井能登守の一行がまたも悠々と甲州街道を上つて行くと、程なく猿橋まで來かゝりました。

猿橋は有名な橋。その橋の處へ來ると往來の人が怖々と橋の左側の方ばかりを小さくなつて瞰るやうにして通るから、與力同心の面々

が不思議に思つて、

『ナゼ眞中を通らぬ、橋がこわれてゐるならナゼ普請をせぬ』

と云つて咎めると、通りかゝつた男が、

『あ、あの通りでございます』

青くなつて指さしをしたから、其の指さしをした處を見ると、欄干に細引が結へつけてあつて其れから釣荵を吊したやうに何か吊るしてあるやうです。何が吊してあるのかと、よく見定めると人間が一人、四ッ手に絡んで高さ十七間の猿橋の眞中から吊り下げてありました。

『こりや怪しからん、誰が此んな事をした』

『鳥澤の親分が斯ういふ事をやりました』

『鳥澤の親分とは何者だ』

『烏澤の糸といふ、このあたりに聞こえた親分でございます』
『何者であらうとも、斯様な惨酷な事をするのを見逃して置くのは何事じや、ナゼ助けてやらぬ』
『糸が申します、これを解いてやつた者があれば生かしちや置ねえと斯う申しますから正直な土地の人は懐え上つてまだ手をつける人はございません』
『憎い奴じや、上を怖れぬ仕方、早く引き上げてやれ』
與力同心は仲間小者と力を合せて此の細引にかけて吊してあつた人人間を引き上げてやりました。
引き上げて見ると、もう眞蒼になつて息が絶えてゐる模樣でしたから、藥を呉れたり水をやつたりして介抱すると幸に息を吹き返しました。

『これ、氣を確かに持て』
『有難うございます』
『其方は何者だ、どうして斯様な目に遭つたのだ』
『如何も相濟みません、なあに、些とばかり此方の惡戯が過ぎたから、其れで此んな目に遭つたんでございます、打捨つて置いて下さいまし』
『斯様な惨酷な事を致すものを打ち捨てゝは置けぬ、聞けば烏澤の糸とやらいふ惡者の仕業じやさうな、うむ、その糸といふ者は何處にゐる』
『なあに、烏澤の親分がやつたんじやあございません、俺が慰みにやつて見たんでございます』
『扨々、貴樣はわからぬ奴じや、包さず申せ、貴樣の爲に仇を取つ

てやる』
『なあに、仇なんぞは取つて戴かなくつても宜しうございます、お陰様で地獄から呼び戻されたのが何よりで、それでもう充分でございます』
『貴様は其の粂とやら云ふ悪漢を怖れて包み隠すと見えるな、我々が聞いた以上は如何なる悪漢なりとても、後の祟りは少しも心配はないのじや』
『如何致しまして、たとへ粂であらうとも、鬼であらうとも、後の祟りを怖がつて其れで包み隠すといふやうなわけじやあございません、どうか打捨つてお置きなすつて下さいまし』
『貴様が白状しなければ、別に調べる道もある、兎も角我々と一緒に本陣まで同道せい』

『如何か、此のまゝお免しなすつて下さいまし、歩けません』
こんな酷い目に遭はされながら何とも訴へないのは其處に何か仔細が無ければならぬと思つて與力同心の面々は、この男を引き立てやうとした時に氣がついたのは此の男に片腕の無いことでした。
これより先、猿橋の西の詰の茶屋の二階で郡内縞の褞袍を着て、長脇差を傍に引つけて酒を飲んでゐた一人の男がありました。年は五十に近いのだが、でつぷりと太つて額際に向ふ傷があつて人相が悪しい、これは前に屢名前の出た鳥澤の粂といふ男でありました。
粂は二階から障子を開け放つて猿橋を一目にながめながら、
『如何だい、野郎をあんなにしてやつた、いゝ心持だらう、あんなのを眺めて酒を飲と餘つぽど旨え』
粂は、猿橋の真中から後の子のやうに、がんりきの身體を眺下げ

其れを見ながら酒を飲んでゐるのでありました。

『親分、如何か許して上げて下さい、あの人も悪い事があるんぢせうけれど、あんなにまでなさらなくつても宜しうございます、何か助けてやつて下さい』

『いゝや、可けねえ、あの野郎には、あれでもまだ身に滲みんといふ處までは行かねえんだ、もう些と窮命さしてやる、お前もよく思を明いて見て置きねえ、何で下を向くんだ、よ、高さは僅三十三尋、甲と些とばかり、下はたんとも深くねえが、やつぱり三十と三尋、甲州名代の猿橋の真中にブラ下つて桂川見物をさせて貰ふなんぞは野郎も冥利だ、お前も可愛がつたり可愛がられたりした野郎だ、よく見て置きねえ、何も其んな處女見たやうに恥かしがつて下を向くことは無へじやねえか』

烏澤の桑の傍にゐる女、それは女輕業の頭領のお角でありました。

『親分さん、如何か助けて上げて下さいよう、死んでしまひます、悪い人は悪い人でも、あれでは餘まり酷うございますから、早く解いてやつて下さいよう』

『いゝや、可けねえ、お前も、隨分女子供を買つて來て危ねへ藝當をさせて錢を貰ける職業に似合はねへ、あの位の仕置が見てゐられねへで如何する、野郎に輕業をさせて今日はお前と俺がお客になつて見物するんだ、此の棧敷は買ひ切りだから誰に遠慮も要らねへ、首尾よく野郎の藝當が勤まれば、二人の手から祝儀を呉れてやらあ』

『親分、どうしても解いて上げる事が出來なければ一層殺してしまつて下さい、あんな目に合はされてゐるより一思ひに殺されてしまつた方が宜いでせうから、わたしも見てゐられないから、早く殺し

てやつて下さい』

『殺しちまつちやあ、身も蓋も無へや、あゝいふ野郎には色々の藝當をさせて見て、死にかゝつたらまた水を吹掛けて生き返らして、またやらせるんだ、まあ、お角、一杯飲みな、俺があの野郎をあんな目に遭はせるから、俺は鬼か魔物見たやうにお前の目には見えるか知れねへが、隨分あゝしてやつていゝ筋があるんだ、あの野郎の生立から國を出るまでの事を殘らず知つてるのが俺だ、俺にあされてあの野郎には文句が云へねえ筋があるんだ、俺にあゝされたから野郎は本望位えに心得てゐやがるだらう、これから悠くり其の話の筋を語つて聞かせてやるから、落着いて聞いて居ねへ、それを聞いてゐるうちには成程と思ふ事もあるだらう、俺が酔興で、あんな輕業をさせるんじやねえと思ふ節もあるだらう……おや〳〵、役ノ

が大勢來やがつたな、あ百の野郎を引き上げたな、うむ、土地の奴等あ俺を憚かつて手が着けられねへのを、木葉役人目、出しやばりがつたな、面白え、如何するか見てゐてやれ、百の野郎が何と吐かすか聞きものだ』

駒井能登守の一行は其の晩、猿橋驛の新井といふのへ泊りました。がんりきの百は一間へ引き据えて置いたが、息の絶えるほど弱つてゐるのだから、繩をかけるまでもあるまいと、與力同心は油斷をして其の儘で置きました。

『鳥澤の粂といふ者を呼んで兎も角も此の男と突き合せて見給へ』

能登守は命令の形式でなく、如何でも宜い事のやうに斯う云つて引込んでしまひました。

興方同心の連中は、丁度慈恵學校の生徒が解剖の屍體を當がはれたやうな心持で、がんりきの再調べに着手すると共に所謂烏澤の糸なる者を引き出さうとしました。

處が糸は只今外出して行方が知れないといふ返事であつたから、更に其の行方を嚴しく詮索させる事にして、一方にはがんりきの百を三度目に引き出して調べて見ました。色々にして泥を吐かせて見やうとしたけれども、前と同じやうに百は一向口を開きません。あんな目に遭はされて、相手の罪を訴へない事が第一不思議であります。

『なあに、俺が惡かつたんでございますから、殺されたつて仕方が無えんでございますから』

と云つたきり。

『貴樣は、大相足の早い奴だな』

『へえ、歩くのは達者でございます』

『貴樣は片腕が無い、それは如何したのだ』

『これは怪我をしたから、お醫者さんに切つて貰つたんでございます』

『貴樣は髪結渡世だと云つたが、その片腕で髪結が出來るのか』

『へえ、兩腕の揃つてゐた時分に叩き込んでありましたから、まだそれが片一方の方へいくらか殘つてゐるのでございます、けれども祿な仕事は出來ませんから此の頃は職人任せでございます』

『貴樣は身延へ參詣に行くのだと申したが其の通りか』

『左樣でございます。お祖師樣を信心致しますから、それで身延山へ參りてえと思つて出かけて參りましたんで』

『身延の道者ならば講中とか連とかいふものが有りさうなもの、一人で出て歩くといふは怪からん』

『それが何でございます、俺共は何の因果か人並より足が早いんでございますから、講中の衆やなんかと一緒に歩いてゐた日には間延るくて堪りません、それでございますから何處へ行くにも一人でトット出て行くんでございます』

『貴様が手形を持つて居らんといふのが如何しても怪しい、處、名前をもう一度其處で申して見ろ』

『先にも申上げた通り、手形も持つてゐたんでございますが、あの橋の眞中へ吊される時に下へ落こつてしまつたんでございます、桂川の水の中へ落してしまつたんでございます、處、名前は山下の銀床の銀といつて……』

『よし、では鳥澤の衆を呼び出してからまた吟味をする、下がれ』

一通りの調べを受けて、がんりきの百は次の間へ下げられて燈火もない眞暗な處へ抛り込まれてしまひました。

『何だ詰らねへ、猿橋の裏から見物させて貰うなんぞは、有難い位なものだが、斯う身體が弱つてしまつたんじや如何にもやり切れねへ、今までのお調べは通り一遍だが、これから洗ひ立てられりやドの道、銀流しが剝げるに定まつてる、いつものがんりきなら此處らで逃げ出すんだが、身體の節々が痛んで歩けねへ』と獨り言を云つてがんりきはコロリと横になりました。

夜中になるとがんりきの耳の傍で囁やく聲がしたから、がんりきはうと〳〵してゐた眼を覺ましました。

『百、確りしろ』

『兄貴か』
『野郎、また遣り損なつたな、いゝから俺と一緒に逃げろ』
『兄貴、動けねへ』
『意氣地のねへ野郎だ、さあ俺の肩につかまれ』
『俺を荷物にしちやあ兄貴、お前も動きがつくめえ、打捨つといて呉れ』
『手前を打捨つて置きやあ、俺の首も危ねへんだ、早くしろ』
『それじや折角だから、お言葉に甘へて御厄介になるべえ』
『人に世話を燒かせずに自分から動き出す氣にならなくちや可けねへ』
斯うしてがんりきを助けに來た奴と、助け出されて行くがんりきは窓から逃げて行きました。窓を上手に切つて、身體の自由になるやうにして細引で細楷子がかけてあつたのを、上手に脱け出したから旅に疲れた與力同心の面々も更に氣が着きませんでした。
『兄貴、よく來て呉れた』
『ほんとうに世話の燒けた野郎とつちやあ』
『どうも濟まねへ』
『はゝあ、今度といふ今度は殘らか身に泌みたと見へて弱い音を吹き出したな』
『如何にも斯うにも身體が痛んでやり切りねへ、そりやさうと、兄貴、俺が此處へ捕まつてる事が、如何してわかつたんだい』
『初狩まで行つた處が、通りかゝる馬方のはなから變な事を聞いたもんだから、それで若しやと引返して見たんだ』
『さうか、兄貴の前だが、猿橋を裏から見せられたのは今度が初め

てよ』

『鳥澤の粂の野郎がさうしたんだといふじやねへか、野郎、あんまり巫山戯た事をすると思つたから、わざ〳〵引返して來て見ると粂の野郎も居なけりやあ、手前の姿も橋のまわりには見えねへから聞いて見ると、これ〳〵のわけで、役人につかまつて吟味最中といふことだから、暫らく三島明神の裏に隠れて夜の更けるのを待つてそれから忍んで行つて見たんだ』

『お蔭様で命拾ひをしたやうなもんだが、何分こんなに身體が弱つてゐた日にやあ所詮遠道は利かねへ、あの役人といふのが、勤番支配なんだから、一度は斯うして助けて貰つても、彼奴等に睨まれた上は、どうも此の道中は危ねへな』

『成程、この容子じやあ、何處かで二三日保養をしなくちやあトテ

も物にはならねへやうだ、と云つて、勤番支配を向ふに廻したんじやあ、滅多な家へ駈込むわけにも行かず、さうだ、い〻事がある、これから粂の野郎の處へ押しかけて行かう、あの野郎、この界隈の親分面をして納まつてゐるのが癪だ、これから二人で押しかけて行つて、手前を預けて來る事にしやうじやねえか』

『粂の親分の處へ出直しに行くんだな、兄貴が一緒に行つて呉たら向うもマンザラな挨拶はすめへから、それじや、さういふ事にして貰ひませう、それから兄貴、お前が俺を出し抜いて甲府へ立たせたあの御新造と娘は、ありあ今何處にゐる』

『は〻〻、まだ其んな事を云つてるのか、ありや今晩下初狩へ泊つてゐるから明日は笹子峠へかゝるんだ、あの峠が危ねへと思つたから、俺が附いて行くつもりであつたが手前が、こんな容子じやあ、

二三日は安心が出來る、二三日安心してゐる間には甲府の城下へ一足お先に着いてゐるから、甲府まで送り込んでしまへば、俺の肩が休まるんだ、百、お氣の毒だけれど、とう〳〵物にならねへらしいせ』

『ふゝん、まださう見縊つたものでも無え』

四

與力同心の面々は其の翌朝になつて仰天しました。

逃げられてしまつた。多寡を括つてゐた爲に逃げられてしまつた。逃げられたのよりも逃げたのが不思議であると思ひました。あんな死にかけた身體で、どうして逃げ出したか。

旅の一輿で練習問題として扱はれた代物ではあるけれども、逃げらたのは不面目である、役人の名折れにもなるから默つてゐるわけには行かないとあつて、與力同心の面々は駒井能登守に此の事を申出で、恐縮すると、

『この度の甲州入りは、何もあの者共を追ひ廻す爲に來たのではない、歩いてゐる間に打突かつて來たら、捉まへて見るがよし、逃げて行つたら逃がして置くがよし』

そこで、今までの引かゝりは一切斷ち切つてしまつて、翌朝駒井能登守の一行は猿橋驛を立ち出でゝ、またも悠々として甲州道中をつゞけました。

猿橋から殿上、横尾、駒橋を通つて大月へ出た時分に、

『この大きな一枚岩のやうな山、これが武田の勇將小山田備中守が

居城岩殿山、要害としても面白いが景色としても面白い、備中守信茂は確かこの城で二度の勇氣を現はしてゐるやうだ、一度は村上義清の手から逆襲された時、五十餘人でこれを守つて守り通して其の間に信玄の援兵が來た。二度は武田の末路の時、織田の兵をこゝで引受けて備中守が斬死した、武田家にはさすがに勇士がある、天險がある、この天險あり勇士あつて遂に亡びたのは天運是非もなし』

『いかにも、武田家の武略には東照權現も心から敬服して居られた、德川家の世になつて甲州の仕法は一切信玄公の爲し置かれたまゝを襲用して差つかへ無しといふ事であつたが、たゞ一つ甲州の軍勢が用ひた毒矢だけは使用相成らずと東照權現のお聲がゝりであつた。信玄は毒矢を平氣で用ひて居られたが東照公はそれをお嫌ひなされた。そこに兩將の器量の相違がある』

『信玄公は、智略に於て第一、惜しい事に人情に乏しい、民を治める事は上手であつたに拘はらず其の德が二代に及ばず、其の術が甲斐信濃以上に出づる事が出來なかつた、越後の上杉謙信は其れに比べると勇氣第一、それとても北國を切り從へたのみで上洛の望みは遂げず、次に織田右大臣、よく大業を爲し得たけれど、其の身は非業の死、豐臣太閤に至つて前代未聞の盛事、それもはや浪花の夢と消えて、世は德川に至りて流れも長く治まる、剛强必らず死して仁義王たりといふ本文を目のあたりに見るやうじや』

例によつて官用だか名所見物だかわからないやうな調子で歩いて行きました。

駒井能登守のつれて來た與力同心は、大抵若い連中でありました。中に老巧者もゐない事はないが、話の中心になるのは若い連中であ

つたから、やゝもすれば批評が出たり、議論が出たりします。

『何といつても信玄と謙信の食ひ合ひが戰國時代では一番力の入つた相撲だ、すべて相撲は段違ひでは面白くないし、さうかといつて同じ型の相撲が力づくで揉み合うのも面白くない、そこへ行くと謙信の勇に信玄の智、義を重んずる謙信と、老獪な信玄と型が違つて互角なのが虚々實々と火花を散らして戰ふ處は古今の觀物だ、まあ あんな相撲は恐らく日本の戰爭に二つとはあるまいな、戰國の時代では正にあれが兩大關だ』

『それは左樣に違ひない、川中島の搦引は軍記で讀んでも人を唸らせる、實際に見て置いたら、ドノ位學問になつたか知れぬ、我々は不幸にして其の時代に遭はなかつた事を憾む位のものだが、併しなほ遺憾な事は、あの兩大關を空しく甲斐と越後の片隅に取組ましてしまつて、本場所へ出して後から出た横綱と嚙み合はせて見なかつた事が殘念だな』

『それは誰でも左樣思ふ、信玄と謙信が、もう少し長生をしてゐたらトテも信長公が天下を取るわけには行かぬ、信長公が世に出なければ太閤といふものも世に出るわけには行かぬ、太閤が出なければ日本の歴史がまた如何な風になつてゐたか見當がつかぬ、それを考へると信玄、謙信といふ人達の日本の歴史上の潜勢力も亦大きなものと云はねばならぬ』

『併し、實際の力は如何であつたらう、信玄や謙信が果して信長や太閤や東照公と戰つて、それを倒し得たであらうか、それ等の人達も、小競合はしたけれども、本場所で晴の勝負をしたことはないから、ほんとうの處は何れが勝り何れが劣ると判斷よ付けられまい』

『それは判りきつた問題だ、謙信に對する信長は、いつも勝負がなかつた、謙信は信長を呑みきつてゐた、信長は斷へず威壓されて怖れてゐた、謙信が、いで北國人の手並を見せて呉んと、將に兵を率ゐて京都へ來らんとする時、信長は蒼くなつて慄え上がつた、丁度その京都へ出やうとする途端に謙信が病氣で死んだ時は、信長はホッと息を吐いて手に持つてゐた箸を抛り出したといふではないか』

『それは左樣であつたかも知れぬ、それを事實とすれば信長といふものが餘りに弱い、少くとも木下藤吉郎を家來に持つてゐた信長、味方の全軍が覆沒しても驚かず、桶狹間で泰然としてゐた信長、たとへ一目なり二目なり置いてゐた謙信とはいへ、さう無慘な敗れを取るやうな事も無かつたらうと思ふ』

『如何して、今川義元や齋藤道三、或ひは淺井朝倉あたりとは相手が違ふ、謙信があの勢でもつて、北國から雪崩の如く一瀉千里で下つて來て見給へ、木下藤吉郎なんぞも、まだ芽生のうちに押しつぶされて安土の城が粉のやうになつて飛ぶ、謙信をもう少し生かして置いて、あの勝負だけはやらせて見たかつた』

『處で、さうなると、武田信玄が默つて見てはゐない、信玄と謙信とは、今いふ通り型が違つて力は互角であつたけれども、氣位の上では信玄は謙信を白い眼で見てゐたやうな處があるわい、謙信を都へ上せて織田と嚙み合はせた其のあとで、ねちり〳〵と道草を食つて腹を太らせながら乘込んで行くといふ、滋太い藝當をやるのが此の入道だ、不幸にして其の時は、あんまり坊主の當り年で無かつたと見え、武田入道が亡くなる間もなく上杉入道が亡くなつた』

『謙信が死んで悅んだのは織田公だが、信玄が亡くなつて運が開け

たのは家康公だ、謙信あるうちは信長公の志は遂げられなかつたやうに、信玄存する間、家康公も實際手も足も出せなかつた御容子だ』

『併し、信長公も家康公も、信玄、謙信とは兎も角も手合せをして居られるけれど、太閤だけは、ついぞ張り合つて見た事がないやうでござるが、あの太閤の軍ぶりと、信玄、謙信あたりと掛け合はせて見たら如何なものであつたらう、信玄、謙信に向つては織田公も家康公も二日も三日も曝いた樣な軍ぶりをして居られたが、太閤ならばどんなもので有つたらうか知ら』

『それは手合せが無かつたゞけに面白い見立にはなる、後に太閤の世になつてから、太閤が此の甲州へ來て、信玄の木像を叩いて云ふ事には、お前も早く死んで仕合せな坊さんだ、今生きてゐたならば

おれの馬の先に立つて、下座觸をするやうな事になるのだと云つて笑つたさうだが、太閤の眼から見ると、そんなものであつたかも知れない』

『いや、太閤といふ人は、派手師で人氣を取るのが上手、何時もそんな事を云つて人を慴伏させるのだが、信玄とても、其れほど易くはない、現に太閤なども家康公の弓矢には閉口して居られた、その家康公を苦しめたほどの信玄だから、太閤のやうな派手師に取つては、謙信よりも信玄の方が苦手かも知れぬ』

こんな話をして小山田備中の城、岩殿山をめぐりながら進んで行く。

『この城によつて反いたものがあるから勝頼が天目山にちゞまつて最期を遂げる事になつてしまつたといふ事じや、小山田備中は果して忠臣であり、勇士であつたらうか知らん、兎にも角にも要害は要

害じや』

大月を過ぎて初狩、立川原、白野から陀彌陀海道と續つて行く。

『山國とはいひながら何方を見ても山ばかりよくも斯う山があつたものじや、岩殿山が要害なばかりではない、甲州全體が一つの要害じや、小佛なり、笹子なりに兵を置けば、如何なる大軍も攻め入る手段が無からう、一夫之を守れば萬卒も超え難しといふのは當にこれじや、東の方はこれで、南はまた富士川口があるばかり西と北とは山又山、信玄も豪かつたには相違ないが、この要害で守るに易く攻めるに難い地の理が宜しい、凡そ四海に事を爲す能はざる時に、この山國に立籠つて天下の勢を引受けて見るも一興ではないか』

『左樣な要害なればこそ、この國が天領であつて、柳澤甲斐守以外には封を受けたものが一人も無い、萬一江戸城に事起つた時は、この城が如何なるお役に立つやも計り難し、さうなると我々の勤めも亦重い』

阿彌陀街道を過ぎると黒野田の宿、こゝは笹子峠の東の麓で本陣があります。日脚はまだ高いけれど、明日は笹子峠の難所を越えるのだから、今夜は此處へ迫ることになりました。

この黒野田へ泊つたものは駒井能登守の一行ばかりではありませんでした。本陣へは先觸があつて能登守の一行が占領してしまつたけれど、林屋慶藏といふのと、殿村茂助といふ二軒の宿屋にも少からぬ客が泊つてゐました。

笹子峠を下つて來た客も此の黒野田で宿を取る、笹子峠へ上らうとする旅人も此處で泊つて翌日立たうとするのだから、自然に足を留める、それに今日は勤番支配の一行が入り込んだから此の小さな山

間の小驛が人を以て溢れるといふ景氣になつてしまひました。
駒井能登守の一行が本陣へ着いてしまつてから、少しばかり經つて此の宿へ入り込んで來た二挺の駕籠がありました。駕籠の中は何者だか知れないが、その傍に附いてゐるのが例の米友であることによつて大抵は想像されませう。幸にして米友は託された人の乘物に追ひつく事が出來たらしい。

五

二つの駕籠が宿の休所へ駕籠を卸して本陣へ掛け合ひにやると、
『今晩は御支配樣のお泊りでございますから』
と云つて、餘儀なく謝絶られてしまひました。林屋といふのと殿村

といふのと、そのいづれも滿員です。滿員でないまでも其の空間といふのは到底この乘物の客を滿足させる事が出來ないものばかりでしたから、さて此處へ來て途方に暮れ、
『弱つたな』
米友が弱音を吹きました。
『兄さん』
駕籠の中から垂を上げて米友を呼びかけたのはお絹でありました。
『何だ』
『その本陣に泊つてゐる御支配樣といふのは、何といふお方だか聞いて見て下さい』
『おい、茶店のおちさん、本陣に泊つてゐる御支配といふのは何といふお方だか知つてるかい』

『へえ、それはこの度、甲府の勤番御支配で御入國になりまする駒井能登守様と申しまするお方でございます』

『御新造さん、お聞きなさる通り駒井能登守といふお方ださうでございますよ』

『駒井能登守、その方ならば、わたしが少し知つてゐる』

とお絹が云ひました。

『兄さん、お前御苦勞だが其の駒井の殿様へ掛け合ひに行つて呉れないか』

『俺等が掛け合に行つた處で……』

米友はさすがに躊躇します。米友もさういふ掛け合ひに適任でないことを自覺はしてゐるのです。槍を取つてこそ宇治山田の米友だけれども、大名旗本を相手に掛け合ひをする柄でないことを知つてゐるから其れで、尻込みをしたがると、

『もと四ッ谷の傳馬町にゐた神尾主膳からの使でございますと云つてごらん、さうして主人の勤め先の甲府へ參る途中でございますが女ばかりで泊る處に困つて居りますからと、事情を話して頼んでごらん、いゝかへ、いつものやうにポン〳〵云つてしまつては可けませんよ、丁寧に云つて頼まなけりや可けませんよ、と云つてもお前さんの事だから何を云ひ出すかわからない、それではわたしが手紙を書きませう、手紙を書いて駒井様宛にお頼み申して見ませう、お前さんは其の手紙だけ持つて行つてお返事を伺がつて來れば宜い事にしませう』

と云つてお絹は駕籠から出て、休み茶屋で手紙を書いて封をしました。

駒井能登守は黒野田の本陣へ着いて休息してゐると、

『申上げます、只今もと四ッ谷傳馬町の神尾主膳様のお使と申しまして、この手紙を持參致しました』

『ナニ、神尾の手紙』

能登守は、少々意外に思つて取次の手から其の手紙を受取つて見ると女文字でありました。

『甲府詰の主人神尾方へ參る途中の者、女連にて宿に困る……はあ、成程』

能登守は早速その手紙を捲き納めながら、

『主人を呼ぶやうに』

本陣の主人が急いで出向いて來て、遠くの方から頭を下げました。

『お召しでございましたか』

『當家には我々の他にも客があるであらうな』

と能登守が尋ねました。

『如何致しまして、御支配様の御着きと承はり、他のお客は皆んなお斷り申上げて、近所の宿屋へ頼みましてございます、御支配様のお連の外には決して誰様もお泊め申しは致しません』

『それは困る、我々が通るのに其んな事をして貰つては人も迷惑する、自分も迷惑する、泊りたい者には部屋の空いてゐる限り泊めてやらなくてはならぬ』

『恐れ入りまする』

『今、斯様な手紙を持たせて寄越した者がある、女連で宿が無くて困却すると書いてある、急いで泊めるやうにして貰ひたい』

『恐れ入りました、お言葉に甘へましてその樣に取計らひを致しま

す』

主人は畏まつて出て行きました。

間もなく本陣の主人が迎ひに行つて、さうしてお絹の一行を案内して來ました。米友も亦お絹一行について案内されて來ました。お絹の一行といつても、それは米友の外にはお松があるばかりでした。お絹は例の通り町家の奥様のやうな容貌をしてゐました。お松は御守殿風をしてゐました。

この二人が駕籠から出た時にはさすがに泊つてゐる人の目を驚かせました。與力同心の面々なども、この思ひがけない合宿の客の奥へ通るのを目を澄まして色々に噂の種が蒔かれました。あれは熊登守殿の親戚の者だらうと云ふ者もありました。いや御支配の夫人……にしては少し老けてゐる――といふものもありました。江戸から連

れて來たのでは人目もうるさいし、人の口もあるから、わざと道中を別にして此の邊で落ち合ふ手筈で來たのだらうと考へるものもありました。そんな筈はないといふものもありました。能登守はさういふ性質の人ではないと辯護をするものもありました。

甲州道中で、山を見たり雲介を見たりしてゐた眼で、二人の女を見たから、目を驚かせる事が餘計に大きかつたと見えて、暫らくは其の噂で持ち切りでした。さうして結局は其の何者であるかを突き留めなければならない義務があるやうに力瘤を入れたものもありました。けれども此の水々しい年増と美しい娘とが奥へ通つたあとで一同は吹き出さなければならない事に出つ會してしまひました。

其は二人につゞいて米友がのこのこと入つて來たからであります。笠を取るまでは其んなに眼につかなかつたけれども、笠を取つて見

ると米友の剃り立ての頭が異彩を放つてゐる事がよくわかるのであります。剃り立てといへば、青々としてツル〳〵したやうに考へられるけれど、米友のは、よく切れない剃刀で削つたのだから、なか〳〵テラ〳〵光るといふわけには行かないのです。處々に削り殘された鉋屑が殘つてゐるのであります。けれども當人は、已むを得ないやうな面をして二人につゞいて上り込んで來たから、誰も其れを見て吹き出さないわけには行きませんでした。

『兄さん、お前の頭を見て皆さんが笑つてゐますよ』

お絹は振り返つて米友の頭を見て自分も可笑くなつて口を袖で隠しました。

『でも家ん中で笠を被る譯には行かねえ』といつて米友が不平な面をしましたから、お松は其れがまた可笑くつて笑ひました。

能登守の一行は「成程、此奴だな」と思ひました。昨日鶴川での出來事を知つてゐるだけに餘計に可笑くなります。

『生え揃ふまで頭巾でも被つて居たらいゝでせう』

『鶴川の雲介の野郎が、こんなにしやがつた、ほんとに惜らしい野郎共だ』

米友は口の中でブツ〳〵云つて自分の頭をこんなにした雲介共を呪ひます。

米友は、お絹とお松とがゐる次の部屋へ陣取り、お絹お松の部屋と中庭を隔てた處が即ち駒井能登守の部屋であります。

お絹は取り敢へず御都合を伺つた上で能登守の處へお禮を申上げに行つて來ました。

能登守は快くお絹と對談して女連の道中を慰めたりなどしました。

駒井の許を辭して歸つてからお絹の胸には駒井能登守を對象として
の一つの心持が浮びました。
甲府へ行けば此の人は自分の元の主人の神尾主膳の上へ立つ人だと
思ひました。同じ旗本でありながら、一方は支配する人、一方は支
配される人とお絹は思ひました。
さうして自分よりも年が若いし、神尾よりも亦若い駒井能登守の幅
が利くのかと思ふと憎らしくなりました。何とかしてやりたいとい
ふ氣になりました。
お絹の思ふには結局男は腕いものであるといふ事でした。まだ三
十前後の能登守、たとへ相當の學問や才氣があつた處で知れたもの
である。固いといふことは、女に接する機會が無い間に限つた事で
相當の手練を以てすれば、男は必ず色に落ちて來るものである。固

いやうなものほど、落ち初めたら速度が強いといふことが、お絹の
日頃から持つてゐる信念でありました。だから駒井能登守が、今甲
州道中を飛ぶ鳥を落す勢で練つて行く時に、これを如何にかして
やりたいといふ事は結局、お絹が持つてゐる唯一の信念から出立す
るといふ事に歸着しますのでせう。大へんやかましい事です。
駒井能登守に會つてお禮を云つてから、そんな心持を起してお絹は
自分の部屋へ歸つて來て、
『お松や』
『はい』
お松は靜粛に返事をしました。
『お前は後程お茶を立てゝ駒井の殿樣に差上げておゐでなさい、そ
れから、まだお風呂がお濟みにならぬ御容子だから、お前は殿樣の

お伴を申上げてお風呂のお世話を申上げねばなりませぬ、こんな山家の事で、氣の利いた女中は居ないし、あゝして殿方が女氣なしの旅をしておゐでなさるのは、何かにつけて御不自由でゐらつしやるし、斯うして今夜も私達が安心して宿へ着く事の出來たは、皆んなあの殿様のお蔭、それにあのお方は甲府の勤番支配といつて内の殿様よりはズット上席のお方、神尾の殿様はあれだけのお方だけれどこの駒井の殿様はこれからお大名になるか御老中になるか、出世の知れないお方』

お紺は、斯う云つてお松を説きました。お松は一々それを聞いてゐましたけれど本意でない事が幾らもあります。自分の甲府へ行かういふのは、神尾の殿様だとか、駒井の御支配様だとかいふお方のお氣に入られやうと思つて來た筈ではないけれど、兎も角も此の場合一通りの御用と御挨拶はつとめねばなるまいと思ひました。好意を持つて呉れた目上の人に對する禮儀といふ心から、さうせねばならないものかと思ひました。

六

駒井能登守は斯うしてゐても毎日宿へ着くと書類を調べたり手紙を認めたりすることで殆ど暇がありません。

書類の多くは公用のもの、手紙は公用と私用とが相半する位でありました。それ等を一通り處理してしまつたあとで、能登守が興味を以て書く手紙が一つありました。

「今日は笹子峠の麓なる黒野田といふ處に泊り申候、明日笹子峠

へ掛る都合に御座候、これより峠を越えて峠向ふの駒飼といふ處まで二里八丁の道に候、小佛峠と共に此の街道中での難所に候、笹子を越え候はゞ程なく勝沼にて、それより甲府迄は一足に候、さすがに峽と申すだけの事はありて中々難澁な山道に候へ共一同皆々元氣にて名所古蹟などを訪らひつゝ物見遊散のやうな心持ちにて旅をつゞけ居り候、また人事にも面白き事多く、土地の名物や風俗などにも少しく變つた事有之候、言葉もまた江戸より入候へば甲州特有の言葉ありて面白く覺え候。昨日はまた甲州名代の猿橋といふのを通り申候、これは名所繪などにて御身も御承知の事と存じ候へ共、猿が雙方より手を延ばしたるやうの形にて土地の人は橋より水際まで三十三尋、水際より水底まで三十三尋も有之候やうに申し居り候處、その間に一本の柱も無く組立候

事が奇妙に御座候、甲州は評判の如く荒き處あり、途中も心して見聞致し居り候。

さて御身の御病氣は如何に候や、われ等斯くの如き愉快なる旅をつゞけ居り候うちにも常に心にかゝり候はこの事のみに候、追々寒さにも向ひ候べく、一しほお厭ひ下さるべく候、昨日受取り申候たよりに依れば少しく快方との事、やゝ安心は致し候へども、甲府入を致したしとは以ての外に候、少々快方に向ひたればとて心に弛みを生じてはならず候、再三申し候通り此の道は男子も憚かる險道、それを女の身にて、殊に病中の身にて旅立んなどゝは想ひも及ばぬ事に候、左樣の心を起さず當分は御靜養專一に可被成候、冬を越して來春身體と共に陽氣の回復する頃を待ちて御入國成され候へ。

今日も女連の二人の者同じく江戸より出で、甲府へ趣く由にて此の宿へ着き申候、御身が甲府入りを致したしとの書狀と思ひ合せておかしく存じ候、右の婦人達も斷えず駕籠乘物に搖られ、人氣の險しさに膽を冷し隨分難澁のやうに見受けられ笑止に存候。」

駒井能登守には奥方があるのでした。それは此の手紙によつても察することが出來るやうに可なり重い病氣、可なり永い患ひにかゝつて江戸に殘されて居るのです。その奥方に宛てて能登守が毎日のやうに手紙を書いては送り、奥方からも亦此の道中の都度々々に音信のある事がわかります。能登守も若いから奥方も若いに違ひない。能登守も綺麗な人だから奥方も美しい人に相違ない。若くて美しい二人は結婚して、そんなに長い間でない事もわかつてゐます。新婚の若い男と女、たとへお役目柄の嚴めしい能登守にも情愛が無ければならぬ筈であります。況してや奥方にはそれに一層の深い情愛が無ければならぬ筈であります。重い病氣と、永い患ひとが二人の中を隔てました。その隔ては斯うして毎日のやうに書いてゐるお互の消息によつて美しく結ばれてゐるといふことが想像されるのであります。

駒井能登守が手紙を書き終つた處へ、お絹から言ひつけられた通りにお松がお茶を捧げて入つて來ました。

『御免遊ばしませ』

『これは〳〵』

と能登守は云ひました。

能登守は風呂に入る前に、書類や手紙の用を濟ましてしまふのが例であります。お松がお茶を捧げて來たのは丁度よい折でありました。

能登守は、お茶を捧げて來たお松の容子を見ると、どうも此の宿あたりにゐる女中とは思はれないから、

『和女は、この家の娘御か』

と云つて尋ねて見ました。

『先程は伯母が上りましてお目通りを致しました』

『あ、左樣であつたか』

宿を周旋してやつた爲にお禮に來た先程の女、この娘は其の連か、さうして先程の女が氣を利かして此の娘にお茶を持たして寄越したのだらうと思ひ當りました。

『何ぞ、御用がございましたなら、仰せつけ下さるやうにとの伯母の申付でございまする』

と云つてお松は能登守の前に指を突きました。

『それは御親切有難いが、別に用事と云つて……』

能登守は丁度眼を落したのが、今書いてゐた手紙であります。折角の事に、

『大儀ながら此の手紙を、明朝の飛脚で江戸へ向けて貰うやうに此の宿の主人へ手渡し下されたい』

と云つて其の手紙を拾つてお松に渡しました。

『畏まりました』

『あの先刻の婦人は、そなたの伯母君でありましたか』

『はい』

『宜しく申して下されよ』

お松は斯うしてお茶を捧げて來て手紙を持つて能登守の許を下る時に、まことに好い殿樣だと思ひました。怖いお役人樣のお頭であら

うと思うて來たのに、打つて變つて優しくて思ひやりがありさうで左樣かと云つてニヤけた御人體は少しもなく、氣品の勝れてゐる事を何となく奥床しく感じてしまひました。

お絹はお松が能登守から賴まれたといふ手紙を自分が受取つて、お松に向つては、

『今、殿樣がお風呂にお出で遊ばしたやうだから、お前は行つてお世話を申上げて下さい、失禮のないやうに』と言ひつけました。

お松は其の言ひつけをも、温和しく聞いて風呂場の方へ行きました。

そのあとでお絹は能登守の手紙を手に取つてつくづくと眺めてゐました。表には「江戸麹町二番町、駒井能登守内へ」と立派な手蹟で認めてありました。

それを見ると、お絹はまたむらむらと變な心が起りました。この手

紙は能登守から其の可愛い奥方に送る手紙だと感づいて見るとお絹の心が穏やかでありません。能登守の奥方にはまだお目にかゝつた事はないけれど能登守が、あの通り若くて綺麗な人だから奥方も亦若くて美しい人に相違ないとは、誰でも想像されることであります。

さういふ事には殊に敏感な此の女は、あんまり人を馬鹿にしてゐると斯う思ひました。お安くない夫婦の間の音信を此妾達に見せつける能登守の仕打を憎いと思ひました。能登守のやうな若い殿樣に可愛がられる奥方は、どんな人か面が見てやりたいやうに思ひました。

自分たちにさういふ心を起させやうが爲に、お松に賴まないでも宜い手紙をワザと持たして寄越して、これ見よがしに見せびらかすのではないか。

これは能登守に取つては非常に迷惑な邪推であります。

『よし〳〵、さういふわけならば此の手紙の中を見てやりませう、どんな憎らしい事が書いてあるか見てやりませう、ほんとに癪に觸るから見てやりませう』

お絹もそれほど惡い女ではないけれど、情事にかけると、いつも好奇心がいたづらをします。そのいたづらが暗い中で、うごめき出すのを抑へきれないといふ惡い癖がありました。

それでも女の事で、荒らかに封を切るといふ事はなく楊枝の先で克明に封じ目をほどいて、手紙の中の文言を讀んで見ると、それがいよ〳〵忌な感じを起さしてしまひました。

この手紙の中は夫婦間の美しい消息を以て滿たされてゐる。遠く旅に行く夫の心と、病んで家に殘る妻の心との床しい思ひやりが溢れてゐます。その美しい消息と床しい思ひやりとが、お絹の心持を散々に惡くしてしまひました。

人の手紙といふものは見るべきものでも、見せるべきものでもないのに、それを盜んで見るといふことは此の上もない卑劣な事で、お絹も其處まで墮落した女ではなかつたのだけれど、好奇から出立して我を失ふやうになるのは淺ましいことであります。

その手紙を讀んでしまつたあとでお絹は遂に其の筆蹟をうつすといふ處まで進んで來ました。駒井能登守の筆蹟を透きうつしにして取つてしまひました。これは如何いふつもりか知らん。さすがに其れからあとを破りもしなければ裂きもしないで、もとのやうに丁寧に封をします。

好奇の隣には、いつでも罪惡が住んでゐる、物を弄ばうと思へば必ず己れが弄ばれる。お絹は惡い計畫をする女ではないに拘はら

す、男を見ると斯ういふいたづら心が起つて、兵馬を口説いて見たり、龍之助の時の留女に出て見たり、がんりきを調戯つたりしてゐたのが、こゝへ來ると駒井能登守を、また相手にする氣になつてしまひました。

能登守の手紙を見てしまつた事が何か能登守の弱點を押へたやうに思はれて、その取つて置いた筆蹟から、或は能登守を困らせてやるやうな、いたづらが出來まいものでもあるまいと思つてゐました。

『友さん、友さん』

お絹は次の間に控へてゐる米友を呼びましたけれども返事がありませんから、

『如何したんだらう、疲れて寢込んでしまつたのかしら』

と獨言を云つてゐる時に、與力同心の部屋に宛てられた處で哄と人の笑ふ聲がしました。それと共に、

『笑つちや可けねへ』

といふ聲は米友の聲であります。

『もうお役人衆の傍へ行つて話し込んでゐると見える、罪のない人だけれど、また間違ひを起さなければ好いが』

大勢を相手に頻りに話し込んでゐる米友を呼び出すも氣の毒だと思つて、お絹は自分で其の手紙を主人の處へ持つて行かうとして廊下へ出ました。

お絹が廊下へ出て見るともの部屋の障子には幾多の侍の頭と米友の頭がうつつて見えます。障子に映つてさへ米友の頭は可笑しい頭でありました。よくあの頭で人中へ出られるものだ。せめて頭巾でも被つて出るか、さうでなければ、可なり頭の毛が生え揃ふまで人

中へ出ないやうにしてゐたら宜からうにと思ひました。處が米友は一向平氣で、

『一生稽古したつて駄目な奴は駄目なんだ、俺等なんぞは本下流の槍の手筋を三日しか稽古しねへんだ、木下流とも云へば淡路流とも云ふんだ、三日稽古をして其の秘傳をすつかり呑込んでしまつたんだ』

何を云つてるのかと思へば、槍の自慢でありました。與力同心の連中へ、坊主頭を振り立て、槍の自慢をしてゐることが歴々とわかります。

與力同心の連中は一人の米友を眞中へ取りまいて、いづれも面白半分な面をして其の話を聞いてゐる處であります。

面白半分な面をして聞いてゐるのはまだ眞面目な方で、米友が此の

部屋へ入つて來る早々から笑ひ頻けて、今だにゲラ〳〵笑つてゐるものもあります。もう腹の皮を痛くしてしまつて、此の上笑へないで苦しがつてゐるやうなのもあります。

これは米友が好んで此處へ押しかけて來たのではありません。彼等は早くも此の宿へ米友が來たといふ事を知つて、相當の禮を以て招いたから米友は此處へ來たのでありました。

與力同心は米友の頭を見て笑つてやらうといふやうな心で米友を招いたのではなく、此の不思議な人物の持つてゐる不思議な能力を解決して見たいからでありました。

併し乍ら招れて來た米友の頭を見た時は哄と笑つてしまひました。人を招いて置きながら其の人の入つて來るのを見て聲を合せて笑ひ出すといふ事は禮儀ではありませんけれども、つい笑つてしまひま

した。併し笑はれても米友は必ずしも腹を立ちませんでした。

『笑つちや可けねへ』

と云つて座に着いてから、やがて話が槍の事まで及んで來て、

『一生稽古したつて駄目な奴は駄目なんだ、俺等なんぞは木下流の槍の手筋を三日しか稽古しねへんだ、木下流とも云へば淡路流とも云うんだ、三日稽古をして此の秘傳をすつかり呑込んでしまつたんだ』

と云ふ氣焔を上げてゐます。

七

お絹が手紙を持ち扱ひ、米友が與力同心の中で氣焔を吐いてゐる間に、お松は風呂場で駒井能登守の世話をして居りました。

お松は次の間に控えて能登守の風呂から上るのを待つてゐます。

その間に兵馬の事を考へてゐます。今甲府の牢内に囚はれてゐるといふ兵馬を助けんが爲には、神尾主膳に頼ることが最良の道であることに七兵衛もお絹も一致してゐるが、お松には神尾の殿様といふ人が、それほど頼みになる人とは思はれません。こゝにおゐでなさる駒井能登守といふ殿様は、神尾の殿様よりも一層頼みになりさうな殿様であると斯う思はないわけには行きません。

甲府勤番支配は、或意味に於て甲州の國主大名と同じことだと云つてお絹から聞かされました。神尾の殿様に比べて強大な權力を持つてゐる人だといふ事もお絹から聞かされました。その上に、ちよつとお目にかゝつたゞけでも大層お優しい方だとお松は頼もしく思ひ

ました。神尾の殿様とは、以前の知行高は同じ位であつたさうだけれども、其の人品は大へんな相違があると思ひました。

それですから、若し神尾の殿様に願つて通らなかつた時は、この殿様に願へば必ず叶へて下さるだらうと思はれてなりませんでした。

或は神尾の殿様に願はない前に、この殿様にお願ひした方が、事がすんなりと運ぶだらうとお松は其處まで考へて來ました。それで此の殿様に、この意味で取入つて置くことが幸であると氣が着きました。お絹がお松をして能登守に取り入らせやうといふ心とお松が自身で能登守を頼らうとする心とは全く別なのでありました。

さう考へて來ると、お松は此の時が好い機會であると思はないわけにも行きませんでした。同じ甲府へ行く旅にしても身分も違へば目的も違ふ、この後、こんなに親しくお目にかゝれる機會があるか知

何かわからぬとお松は其處へ氣が着いたから、如何しても今宵を過ごさず能登守に向つて、兵馬の身の上のお願ひをして見る外はないと心が少し焦つやうになりました。

こんな事を考へてゐる時に、能登守は風呂から上つた容子でありましたから、お松は立つて行きました。さうしてお松は能登守の着物を着替る世話をしてやりました。能登守はお松の親切を喜んで、打ち解けて見えました。

お松は言ひ出さう〳〵としましたけれども、つい言ひ出し惡くなつて、お願ひがございますと咽喉まで出て其れが言へないで自分ながら氣が焦つのみでありました。

お松が能登守の爲に雪燈を捧げて長い廊下を渡つて行く時に、笹子峠の上へ鎌のやうな月がかゝつてゐるのが見えました。

能登守は靜かに廊下を歩きながら其の月をふり仰いで見ました。
『和女は、江戸から此んな所へ來て淋いとは思はないか』
と能登守はお松を顧みて斯う云つて呉れました。その言葉があつた爲めに、さきから一生懸命で、言ひ出さう〳〵としてゐたお松は一時に力を得て、
『否え。淋しいとは思ひませぬ、少しも』と言葉にも力を入れて返事をしました。
『それは豪い』
と云つて能登守は賞めたけれど、お松の言葉よりは鏡の樣な月の方に見恍れてゐるのでありました。
『殿樣』
お松は此處で勢一杯に殿樣といつて能登守を呼びかけましたけれど

自分ながら其の言葉の顫えてゐる事に驚いた位でありました。
『何』
能登守は、お松の改まつた容子を少しく氣に留めた容子です。
『あのお願ひでござりまする』
とお松は、いよ〳〵改まつた言葉でありました。
『願ひとは』
能登守は鏡のやうな月を見てゐた眼を、お松の方へ向けました。さうして雪燈の光に照されたお松の面に一生懸命の色が映つてゐることを認めて、これには仔細が有るだらうと感じました。
『あの、わたくし共が甲府へ參りまするのは寃の罪で牢屋につながれてゐる人を助けに參るのでございます』
『人を助けに』

『それ故、殿様のお力添をお願ひ致したいのでございまする』
お松は夢中になつて此處まで云つてしまひました。此處まで云つてしまへば兎も角も安心と、ホッと息を吐きました。
『果して寃の罪であるものならばわしの力を借りるまでもなく罪は赦される、若し、まことに罪があるものならば、わしが力添をしたとて如何にもなるものではない』
と能登守はお松の願ひの筋には深く觸れないで、やゝ慰め面に斯う云つたゞけでした。併し、お松はもう一旦切り出した勇氣がついたから、その頼みの綱を外すやうな事はしませんでした。
『否え、確に寃の罪なのでございまする、その方は決して盜みなどをなさる方ではないのでございまする、公儀様の御金藏を破るなどといふ大外れた事をなさるお方でないことは、わたしが命にかけてもお請合を致しまする、それが有らぬお疑ひの爲に只今御牢内に繋がれておゐで遊ばす故、わたくしは心配で心配でなりませぬ、何年して其のお方をお助け申上げたいと、それでわたくし共は甲府へ參りますのでございまする、甲府へ參りまして、神尾主膳様からそのお願ひを致すつもりでございますが……』
お松は一息にこれだけを云つてしまひました。能登守は、お松の願ふほど熱心に其れを聞いたのか聞かないのか知らないけれど、笹子峠の上にかゝつた鎌のやうな月にばかり見恍れてゐるのでありました。
そのうちに廊下を渡り了つて、能登守の居間の近くまで來ました。

八

お松が歸つて來た時分に、お絹の居なかつた事は別に怪しい事ではありません。

お絹は風呂から出ると浴衣を引かけたまゝで暫らく溪流に臨んで湯上りの肌を山嶽の空氣に打たせてゐました。

前にいふ通り、すぐ眼の上なる笹子峠には鎌のやうな月がかゝつてゐる。四方の山は桶を立てたやうで、桂川へ落ちる笹川の溪流が淙々として緣の下を流れてゐます。

自分に言ひ寄つて來る男を物の數とも思はないやうな氣位が、年と共に薄らいで行くことが自分ながらよく〳〵わかります。それ故にがんりきとお角とが仲よくして歩く處を見ると嫉けて仕方がありませんでした。

有體に云へば、今のお絹は男が欲しくて欲しくて堪まらないのであります。男でさへあれば、どんな男でも相手にするといふほどに荒んで來る事が此の頃でも斷えず起つて來るやうでありました。

『あの、がんりきの百藏といふ男、御苦勞樣にわたし達を附け覗つて此の甲州へ追つ蒐けて來たが、あの猿橋で土地の親分をやらに捉つまつて酷い目に會つたさうな、ほんとにお氣の毒な話』

とお絹はがんりきの事と、それが猿橋へ吊るされたといふ話を思ひ出して、ほゝ笑み、

『七兵衛が助けると云つて出かけたが、ほんとに助かつたが知ら、酔興とは云ひながら可哀相のやうな心持がする、何のつもりか知ら

ないけれど、わたしを追つ蒐けて來たと思へば、あんな男でも萬更憎くはない、命がけで、わたしの後を追つ蒐けて來る心持が可愛い』

今となつては、たとへ無賴漢であらうとも何であらうとも自分に調戯つて呉れる男のないことが淋しい位でありました。

こんな事を何時まで考へてゐても際限がないと、お絹は浴衣の襟をつくろつて其處を立たうとした時に、縁の下の笹籔がガサと鳴いて幽靈のやうなものが谷川の中から、煙のやうに舞ひ出した。あれと驚く間もなくお絹の首筋をすーつと一卷捲いてしまひました。

『何を……何をなさるの……』

その幽靈のやうなものは、お絹の首筋をすーつと捲いて、その面を自分の胸のあたりへ厳しく締めつけたものだから、それ丈お絹は言葉を出すことが出來なくなつてしまひました。

『御新造、がんりきだ、百だよ』

と云つて有無を云はさず縁の下へ引下してしまひました。

河童に浚はれるといふのは丁度斯んなのだらうと思はれます。お絹は一言も物を云ふ隙さへ無く欄の上から川の岸の笹籔の中へ、何者とも知れないものに抱込まれてしまひました。何者とも知れないのではない、その者はお絹の首を抱いて其の面をしつかりと胸に當て口の利けない様にして置いてから、

『おれは、がんりきだ、百蔵だ』

と名乗つた筈です。

本陣の方では、こんな事を氣の付いたものが一人もありませんでした。

能登守は事務に精勵であつたし、米友は與力同心を相手に氣焔を吐

いてゐるし、その他の連中とてもそれ〴〵の仕事をしてゐたり世間話をしてゐたりしてゐたものだから、一向此の方面の事は閑却されていました。たゞ一人お松だけがお絹の湯上りが、あんまり悠長なのを氣にして、二度までも湯殿へ來て見ましたけれど其處にも姿を見ることが出來ませんでしたから、漸く氣が揉め出して米友を呼んで見やうと思ひましたけれども、その米友は、相變らず與力同心を相手に槍の氣焰を吐いて夢中になつてゐるやうですから、氣の毒のやうな心持がして、それで、また三度まで廊下の方へ行つて見ました。

お松が廊下を通つた時に、廊下の縁の闇の中から、

「お松」

「はい」

自分を呼んだのは、たしかに七兵衛の聲です。

「お師匠さんはゐるか」

「今、お風呂に」

「風呂ではあるまい、風呂にはゐない筈だ」

「えゝ、今ちよつと何處へか」

「それ見ろ」

七兵衛から、それ見ろと云はれてお松はギョッとしました。

「友さんを呼びませう、御支配のお役人樣もおゐでなさいますからお頼み申しませうか」

斯ういつて、あはてると七兵衛はそれを押へて、

「米友にも役人にも知らせない方がいゝ、ナニ百の野郎は痛み所で身動きも碌に出來ねえのだから、大した事になりはすめえ、俺がこ

れから一人で行つて捉まへて來る、お前は此のまゝ座敷へ歸つて靜かにしてゐるがいゝ、米友にも矢張默つてゐた方がいゝよ、彼奴が下手に騷ぎ出すとまた事壞しだ』

七兵衛は、これだけの事を言ひ殘して、闇の中へ消えて行きました。

鎌のやうな月が相變らず笹子峠の七曲りのあたりにかゝつてゐる時に、黑野田の笹川の谷間から道のない處を無理に分け登つて行くものがあります。

肩に引かけられた女は少しの抵抗する模樣もなく、脊中へグッタリと垂れた面へ折々木の繁みを洩れた月の光が觸ると、蠟のやうに蒼白く死んだものとしか見えません。

それを脊中へ載せて路のない處を登つて行くがんりきの百藏。これも亦面の色が眞蒼で、ほとんど生ける色はありません。木の根に助けられたり、岩の角に支へられたりして上るには上るが、その息の切り方が今にも絶え入りさうで、やつと一丁も登つたかと思ふ時分に、力にした草の根が拔けると一堪りもなく轉々と下へ落ちました。

『あゝ、苦しい』

二三間も下へ落ちて岩の出た處で支へられた時に、がんりきは、もう苦しくて苦しくて堪らなく見えましたけれど、その肩へ引かけてゐたお絹の手首は決して放すことではありません。

はッ、はッと吐く息は唐箕の風のやうであります。何しても、がんりきは腕が一本しか無いのです。その一本しか無い腕で、お絹を肩に擔いで、足と身體で調子を取つて上らうとする心だけが逸つて、岩に足を踏掛ると足がツルリと辷りました。

『あつ、苦しい』

またも二間ばかり下へ辷り落ちたがんりきは、お絹と共に折り重なつて暫らくは起き上がれません。

『あつ、苦しくて堪らねえ』

やつと起き直つて見ると、向ふ脛からダラ〳〵と血が流れてゐました。

『畜生、こんなに向ふ脛を摺り剝いてしまつた』

そのまゝにしてお絹を引かけて、また上りはじめてまた辷りました。

『此奴は可けねえ、いくら力を入れても辷つて上れねえ、はッ、はッ』

やつと一間も登ると、ズル〳〵と七尺も辷つては落ちる。

『こんな事をしてゐたんじやあ初まらねえ、帶は無えか、帶は』

こゝに至つてがんりきは、とても手首を掴まへて肩にかけて上ることの覺束ないのを悟つたから、帶を求めて脊中へ括りつけて登りにかゝらうと氣がついて、はじめて手首を放して大事さうにお絹の身體を岩蔭に置きました。

『死んでゐるんじや無え、殺したと思ふと違うんだよ、もう少し辛抱すりや活して上げますせ御新造、はッ、はッ』

例の鎌のやうな月が、微なから其の光を差して、眞白なお絹の面と肌とが活きて動くやうに見え出した時、がんりきは何處かで大木の唸るやうな音を聞きました。

猫が鼠を捕つた時は、暫らくそれをおもちやにしてゐるやうに、自分で其處へ抛り出したお絹の面を見ると、がんりきは物狂はしい心持で、

『斯うしちやあ居られねえんだ』

再びお絹を脊負ひ上げて登りはじめやうとしたが、この時はがんりきの身體もほとんど疲勞困憊の極に達して自分一人でさへ自分の身が持ち切れなくなつてしまひました。この女を荷つてこの崖路を登ることは愚か、立つて見つめてゐるうちに、眼がクラ〳〵として足がフラ〳〵として、どうにも持ち切れなくなつたから、がんりきはお絹の傍へ打倒れるやうにして、烈しい吐息をはつはつとつきながら峠の上を仰いで、

『矢立の杉が唸つてゐやがる、矢立の杉が唸ると山に碌な事は無えんだ、せめて、あの杉の處まで行きたかつたんだが、この分じやあ最う一足も歩けねえ、といつて此れから下へも降りられねえ、自分ながら自分の身體が始末に行けねえんだから自烈てえな、旨くせしめるにはせしめたけれど、これだけじやあ何にもならねわや、俺の腕は此んなもんだといふ事を七の兄貴にも見せてやりてえし、桑の親分にも見せてやりてえんだ、それからまた勤番の御支配とやらが泊つてゐる本陣から盗み出したといへば隨分幅が利かねえものでもねえ、これから此の女を連れて一足先に駒飼まで行つて、其處で、どんなものだと皆んなの面を見てやりあ、後は如何なつたつて蟲が居らあ、峠を越てしまはねえうちは此方のもんで此方のもので無えやうなものだから、何とかして潜ぎつけてえんだが、身體が利かねえから仕方がねえ、あゝ、ほんとに弱つた、死んでしめえさうだわい』

がんりきは遂に其處へへたばつて動けなくなりました。がんりきが動けなくなつた時分に、お絹が少しく動き出して來ました。お絹が少し動き出した時分に、下の方で喧ましい人の聲、上の方でも亦人

の聲。
昏倒しかけたがんりきは、お絹の動いたことにはまだ氣が着かなかつたけれど、上下で起るその人の聲は早くも耳に入ると、必死の力でむつくり起き直つて見ると提灯の光りが、いくつも〳〵黒野田の方から、谷川と崖路を傳ふて此方を差して來るのがわかります。
上の方、矢立の杉のあたりからも亦火影がチラ〳〵、して見ると自分はもう取り捲かれてゐるのだ。がんりきは遽に立ち上つてよろめきながら、
『トテも逃げられなけりやあ、こゝで心中だ、生きて峠が越えられねえのだから死んで三途の川を渡るのも、乙な因縁だらうじやねえか、道行の相手に、まあ此の位の女なら俺の身上では太した不足もあるめへ、猿橋の裏を中ぶらりんで見せられたり、笹子峠から一足

飛びに地獄の道行なんぞは、あんまり洒落過ぎて感心もしねえのだが、どうも斯うなつちやあ仕方がねえ』
だらしゆきがお絹の傍へ寄つた時、
『何、何をするの』
お絹は生きてゐました。自分の咽喉へ掛けやうとした、がんりきの手を夢中で振り拂うと、
『おや』
がんりきも驚いたが、其の途端にフラ〳〵と又しても岩を辷ると、あはてゝ其の片手にお絹の着物の裾を掴む、裾は掴んだけれども辷る勢ひが強くてお絹諸共に釣瓶落しに谷底へ落つこちます。

その翌朝、駒井能登守の一行は例によつて此の本陣を出立しました。お絹お松米友の一行はそれに從つて行く容子がありません。

昨夜、七兵衛はお松にことわつて誰にも云ふなと云つたに拘はらずお松は其れを默つてゐるわけには行かないから、與力同心を相手に氣焰を揚げてゐた米友を呼んで話しました。それから騷ぎが大きくなつて居合すもの總出の勢で、山狩をして峠の方へ狩り立てゝ行くうちに、尋ぬるお絹が半死半生の體で谷間から這ひ出ノ〳〵來た。

兎も角も、お絹が逃げて來た事によつて一同も安心

つたが、お絹は一切の事を語りません。それ故に誰も其の事情を知るものが無く、或は山の天狗に浚はれたのではないかと思つてゐます。

無事で逃げて歸ることの出來たお絹は、實は能登守の一行について行きたかつたのだけれども、身體が弱つてゐるから、心ならずも此處に留まる事になりました。

斯くて駒井能登守の一行が黑野田を出ると、幾ケ所の橋を渡り、追分を通つて、いよ〳〵笹子峠へ掛りました。

『これが笹子峠の矢立の杉』

中の茶屋を通つて矢立の杉の下で一行が立ち止まつて其の杉を見上げました。

『はゝあ、矢立の杉といふのは此れか』

と云つて杉の廻りを廻り歩いてゐる連中が面白半分に手を合せて其の杉の大きさを抱えて見ました。

『丁度七抱え半ある』

『昔の歌に、武夫の手向の征箭も跡ふりて神寂び立てる杉の一もと とあるのは此の杉だ』

『ナニ、何と云はれる其の歌をもう一度』

と云つて寫生帖を持つてゐたのが念を押ました。

『武夫の手向の征箭も跡ふりて神寂び立てる杉の一もと』

『成程』

寫生帖へ其の歌を書き込んで、

『讀人は』

『讀人知らず』

『年代は何時頃』

『それも知らぬ』

『はゝゝ、よく歌だけを記憶して居られた、感心な事』

と云つて寫生帖が感心をすると、古歌の通が笑つて、

『此處の石に刻んであるから其れで知つたのだ』

『はゝあ、石碑の受賣か、その石碑も亦相當に古色があつて面白い年代は何時頃だらうか知ら』

『よく年代を知りたがる人じや』

『ゐゝ、明暦とある、肝腎の年號の數字の處が缺けてゐて見えない、明暦も元年から初まつて三年までである、嚴有院様の時代であつて、左様、今から考へるとざつと二百年の星霜を經てゐる』

『して見ると其の歌も其の時代に咏まれたものであらう』

『いや、もつと調子が古いわい、江戸時代の產物ではない、一體この笹子山は一名坂東山といつて古來關東で名のある山、日本武尊以來の歷史がある』

『成程、して見ると其の歌は日本武尊がお咏みなされたお歌ではないか』

『違ふ、日本武尊時代には此んな和歌は流行らなかつた』

杉の根本で勝手な考證を試みてゐます。

『古來、この道を軍勢が通る時は必ず此の杉に矢を射立てゝ、山の神に手向けをして通るならはしになつていた』

『我々も其の古例を追うて、弓矢の手向をして行かうではないか』

『我々のは、甲川を治めに行くので、征伐に行くのとは違ふ、それ故、弓矢の手向けをするにも及ぶまい』

『天文十六年の事、原美濃守が此處の關所を千貫に積つて知行してゐる、若し武田勝頼が天目山で討死をせずに東へ下つたものとすれば、この峠が第一の要害になつたのであらうけれど、この事無くして止んだから、この峠に軍勢を上せた事は、先づ近代には無いやうである、小田原北條の一族、左衛門太夫氏勝が八千餘騎で此處に陣取つて足輕を駒飼まで進めたこと、これが近ごろの記錄であるやうじや』

『よく、お調べでござるな』

『それから昨夜、土地の人に就いて聞けば山に何か異變が起る時は此の杉が唸るといふ事じや』

『杉が唸るといふのも、おかしな事であるけれど、風でも吹けば此れほどの大木故、凝として默つてはゐまい』

『それから時々、此の杉の頂邊へ天狗が來て巣を食ひ、折々下界から人を浚つて來て此の杉の枝へ突つ掛けて置くといふ事じや』

『はゝあ、天狗が留るか、成程、木も此の位大きくなれば、いかさま天狗が住めさうじや、それといへば、昨夜のあの婦人、あれが若しや其の天狗に浚はれたのではないか』

『成程、よい處へこじつけたものだ、或は其の天狗がまだ一人二人の婦人を浚つて此の杉の枝へ掛けて置くやも知れぬ、よく調べて見るがよい』

『併し……また婦人の擧動はあれは考へものだな』

杉の考證と傳說は轉じて、昨夜のお綱の擧動及び其の行方の事になりました。

お綱が一切を語らなかつたから、これ等の人々も何と判斷のつけや

うがなく、結局此の矢立の杉あたりに棲む天狗の仕業といふ里人の迷信を打ち消しもせずに出て來たものでありました。けれども、こゝで考へ直して見れば如何しても解せぬ事であります。

『さて此の道中は、色々な珍らしい事に出會す、顧みて數へると、まづ駒木野の關所であの女、次に小佛峠で足の早い奴、それから鶴川では槍をよく使ふ小兵の男、それから猿橋へ來て橋へ吊るされたものが前に足の早い奴で、また片手の無い奴、それを捉まへて見ると其の夜のうちに消えて亡くなる』

『其れ等と考へ合せると、昨夜の婦人の擧動、それから前の色々の珍事に一々絲が引いてあるやうにも思はれる、若しあの片手のない奴が、昨夜の婦人を浚つて逃げたのではないかとも思はれる、さうだとすれば婦人が一人で歸つたのがオカしいけれど、あの片手の無

い奴は此のあたりの山に隠れてゐるかも知れぬ』
猿橋の問屋で逃げられたがんりきの事、若しや此の道中の何れにかと、雑談に耽りながら左右に眼を配りつゝ進んで行つたが、笹子峠の七曲りといふのへ来た時分に、
『あれ〳〵、あの谷川で水を飲んでゐる者があるぞ』
駒井能登守が谷底を望んで斯う云ひましたから一同は皆んな谷底をのぞいて見ました。
駒井能登守が水を飲んでゐたものを見かけたのは、峠が下りになつてから五六丁の處で、其處は俗に坊主澤といつて橋の桟道がいくつもかゝつてゐて下には清流が滾々と流れてゐる處です。
能登守が、其處で水を飲んでゐる何者かを見かけて聲をかけた時はその者は跳のやうに山の中へ駈込んでしまひました。その駈込んだ

處を誰もチラと見たものですから、それと云つてバラ〳〵と追ひかけます。
それからの一行は、寫生帳も史蹟の話もなくて其の怪しい者を捕へるべく前後左右から遠網にかけるやうにして、峠を下りついた處が駒飼の宿であります。
駒井能登守の一行が此の怪しの者を駒飼の宿に近い處まで追ひ卸ろした時分に、それとは逆に甲州街道を鶴瀬から本陣の土屋清左衛門の許を立つてお關所を越えて駒飼の方へ行く一行がありました。これも槍を立て數人の供を引つれて東に下るものと見えました。それは供揃ひはさほどでなかつたけれど、乘物を三つも並べた處が物々しい。その三つの乘物のうちの一つには人がゐたけれど、あとの二つは空でありました。その一つに乘つてゐる人といふのは神尾主膳

でありました。して見れば、明いてゐる二つの乘物の用向も大抵わかる、主膳は遊山がてらにお絹お松の一行を迎へに來たものと見て宜しい。實は笹子峠の此方まで迎へるつもりであつたのを、如何しても此の峠を越し大庭まで行かなければならなくなつた事情が出來たものでありませう。

『殿樣』

『何だ』

『彼れが天目山の道でござりまするな』

『左樣』

『必ず天目山へ上つて見ると仰せでございましたが、如何してまた急にお模樣替なのでござりまする』

『昨夜、急用が出來た故、山上りなどをしては居れぬ』

『急用と申しますのは』

『黑野田の宿で何か返事が出來たといふ事じや』

『へえ、あのお絹樣と、それからお松どのとが何か難儀にお遭ひなされましたか』

『左樣』

『それは大變でござりまする、して其の難儀と申しますのは』

『委しい事は分らぬ、盜賊か胡麻の灰か、そんな事に過ぎまいと思ふ』

『それは誠に心がゝりでござりまする』

『兎に角、黑野田へ行つて見ての上でないと拙者にも分らぬ、それから澁田、この道中、事によると駒井能登守といふ旗本と出逢ふかも知れぬ、それは此の度甲府へお役になつた拙者の知合だ、多分、

我々が峠へ登る時分に、駒井は下りて來るだらうから、やがて行き逢つた時は乘物を下りて名乘り合ふのは事面倒だから、知らぬ面をして通れ』

『畏こまりました』

『成るべくならば神尾主膳と名乘りたくない、尋ねたらば諏訪の家中で江戸へ下るとでも申して置いたが宜しからう』

『畏まりました』

斯うして神尾主膳の一行が關所を出て橋を渡つて休所の、すしや重兵衛の前を通つて駒飼へと進んで行きました。

その時は、まだ早朝の事でありました。神尾主膳の一行が駒飼の宿から出て、いよ〳〵笹子峠の上りにかゝらうとする時分に不意に傍へなる林の中から人が飛び出して主膳の駕籠わきに轉がつてしまひました。

『何者だ』

といつて家來の連中が立ち塞がると、

『如何かお助けなすつてお呉んなさいまし、何方樣かは存じませぬが、九死一生の場合でございます、お見かけ申してお願ひ申すんでございます。如何かお助けなすつて下さいまし』

駕籠の傍へ手をついたのは、成程、九死一生と見えて髪は亂れ、白い着物は裂け、身體ぢう突き傷だの擦傷だので慘憺たるもので、その上に右の片腕が一本無い男であります。

『次第によつては助けてやるまいものでもないが、其の方は何者だ、如何して斯樣なことになつた』

『身延山へ參詣する者でございます、途中で惡い奴に遭つて此んな

目に逢はされてしまひました、お話し申せば長いことでございますこゝではお話しが申上げきれません、あれ今追手がかゝります、追手といふのはお役人でございます、お役人が間違へて、私を惡者だと思つて捉まへに來るんでございます、今お役人につかまつては、私も言ひ解くことが出來ませんから、どうか暫らくお隱まひなすつて下さいまし、そのうちにキッと私の罪のない事がわかるんでございます、同じ事ならあのお役人に捉まりたく無いんでございます』

『はて、其方を追かける役人といふのは』

『今、向ふからやつて參ります、今度、江戸表からお越しになつた駒井能登守様といふお役人の御人數でございます、あのお方に捉まると私は是が非でも惡者にされてしまひますから如何かお助けなすつてお呉んなさいまし、もう此の通り身體が弱つてゐますから一足

も動けませんでございます』

『成程、其の方を追かけて來たのは駒井能登守の人數であると申すな』

『左様でございます、あれもう、ああやつて追かけて參ります』

『殿様、お聞きの通りの次第、如何取計らつたものでございませう』

『よし、助けてやれ』

『では能登守様から故障がありました節は如何取計らひませう』

『拙者が引受けるから宜しい』

神尾主膳は一諾してしまひました。怪しい奴は弱りきつてゐたに拘らず、この一諾を聞いて躍り上るほどに喜んで

『有難うございまする、この御恩は死んでも忘れは致しませぬ』

神尾の駕籠を拜みます。神尾はそれを見て、

『何處の何者か知らんが、危急と見受ける故、兎も角も一應助けて取らせる、瀧田、幸駕籠が二つ空いてゐる、それへ此の者を載せてやれ』

『畏まりました、これ、殿様がお助け下された上に、この乘物をお貸下さる、有難く心得て此の中へ入れ』

『何から何まで有難うございます、それでは御遠慮なしに、お言葉に甘へまして、どうか御免下さいまし』

お絹を乘せて伴れて歸るべき乘物へ怪しい奴を乘せてやりました。怪しい奴は即ちがんりきの百藏であります。

さうして置いて神尾は、

『若し能登守の手の者が、何とか尋ねても知らぬ存ぜぬと云つてしまへ、六づかしくなれば拙者が應待に出る、其方達は取り合はずに乘物を進めろ』

果して幾ばくもなく、神尾主膳の一行の前にバラ〳〵と驅けて來たのは駒井能登守の手の與力同心とお手先の者共でありました。

『失禮ながら、そのお乘物暫らくお待ち下されたい』

『何の御用でござる』

『只今、一人の怪しき者を追込んで參りし處、この邊にて姿を見失ひ申した、若しやお見かけはござらぬか』

『頓とお見受け申さぬ』

『はて』

と云つて能登守の手の者は、挨拶に出た主膳の家來共を怪訝な眼でながめ、

『只今、この處で慥に其の者の姿を見かけたものがござるが』

『我々の方に於ては左様な者を一向に見かけ申さぬ』
『年の頃は卅位、色が白く、小作り、もとは江戸の髪結職であつた者、それに誰が眼にも著しいのは左の片腕が無い事』
『はゝあ』
『怪しい廉が多い故、一應取押へて置きたい』
『それは御苦勞千萬、して各々方は』
『我々は、この度甲府勤番支配を承はつた駒井能登守の手の者、甲府へ赴任の道すがらでござるが』
『然らば、これより峠を登り行くうち、萬一左様なものに出逢ひ申さぬとも限らぬ、その折は取押へてお引渡しを致すでござらう、これにて御免』
これには拘はずに、乘物を進めやうとするから、能登守の手の同心

と手先はあはてて其の前に立ち塞がるやうにして、
『あいや、お暇は取らせぬ、暫時、お待ち下されたい、して御貴殿方は誰方でござるか、お名乘を承はりたい』
斯う云つて能登守の手の者が、神尾の駕籠先を押へるやうにしました。こゝに至つてドチラにも多少の意地づくが見えました。
『各々方にお名乘申す由はない、絶つて姓名が承はりたくば能登守直々にお出であるが宜しい』
と神尾の者が斯う云ひました。
この時に、駒井能登守と渡邊といふ與力が峠を下りて近い處までやつて來ました。
それと聞いて渡邊は神尾の駕籠近く寄つて來て、
『お乘物の中へ物申す、拙者は甲府勤番支配の與力渡邊三次郎、失

禮ながらお名乘を承はりたい』

この時に神尾主膳が駕籠の垂を上げて、外を見ると折柄來かゝつた駒井能登守と面を合はせたが、さあらぬ體で、

『拙者事は、同じく甲府勤番の組頭神尾主膳でござる、今日は私用にて此の處を通行致す故、公用向の禮儀は後日に讓る、お尋ねの怪しい者とやら一向に我等は存知致さぬ、前路にちと急の用事あるにより、これにて御免』

斯う云つたまゝで、垂を下ろさせてさつさと駕籠を進せました。だから能登守の左右の者が其の無禮を憤つて眼と眼を見合はせると、能登守は何氣なき風情で取り合ひません。

十

斯うして神尾主膳の一向は笹子峠を向うへ越えて黒野田の本陣へ着きました。

黒野田の本陣へ、神尾の一行が着いた分には仔細がないけれど、その一つの駕籠の中に隱して來た、がんりきを此の宿へ連れ込むとすれば無事ではない筈だが、一行が此の本陣の前へ着いた時に、がんりきの駕籠だけは此處へ留めないで、

『烏澤まで送つてやれ』

といふことになつたのは、思ふに又しても其の烏澤の粂といふ親分の處まで送り返されるものであらうと思はれる。

がんりきだけを烏澤へ送りとゞけて、神尾の一行が、此の本陣へ着いた時に、本陣では前の晩に能登守を泊めたのと同じ位の持てなしをせねばなりません。

さうして夫々、失禮のないやうにお迎へ申したけれど、こゝに奇怪なのはお絹の素振りでありました。

此の時、お絹はもう昨夜の災難の事などはケロリと忘れてしまつてゐるやうでした。朝寢を少し永くした位の處で、主膳を迎ふべく薄化粧などをして、主膳が着くと、眞先に立つて、下へも置かぬ持てなしが何も知らぬ本陣の人々には別段おかしくも無かつたらうけれど、前後を知つてゐるお松には、あんまり空々しいやうに思はれてなりませんでした。

何故ならば、駒井能登守を持てなす時は、神尾の殿樣などは有つても無くつてもいゝやうな口振をして見せたのに、其の能登守が去つて神尾主膳が來て見ると、能登守なんぞは何處を通つたかといふやうにして、もう一も二も神尾でなければならないやうに、そわ〳〵してゐるからであります。よくも斯うまで手のうらを返すやうになれるものかと、お松がそれを餘りに空々しく淺ましく思つたのも無理はありません。それのみならず、神尾が此處へ着くと共に、早速に酒宴が初まつて、お絹が先立ちて其の周旋をするといふ體たらくになつてしまひ、お松が座を外して隱れるやうにしてゐると、神尾主膳は、お絹を相手にして盛んに飲みながら、お前も一人で貞女暮しは淋しい事だらうとか、殿樣も甲府ではまた罪をお作りになつた事でございませうとか、お松か、あれも年頃になつたな、お前の仕込だから抜かりもあるまいとかいふやうな言草を洩れ聞いたお松は

面から火が出るやうでありました。

こゝに憐むべき宇治山田の米友は己れの間に閉ぢ籠つたまゝ沈痛な色を漲らせて腕を組んで物思ひに耽つてゐます。

米友は、此處までの道中で二度失敗つた事を其の良心に責られてゐます。

米友が失敗つた其の一度は、上野原の宿で一行に出し抜かれて、無理な鶴川渡りをしてやつと追ひついた事、その二度目は昨夜の騒動であります。

彼は、この道中が終るまでは、寸分の隙もなくお絹とお松とを守つて居らねばならぬ使命がある。彼自身も亦其の使命を粗末にしやうとは思つてゐなかつたのに、昨夜といふ昨夜、與力同心に招かれて

槍の話になつて有頂天に氣焔を吐いてしまひました。

その隙にお絹が天狗に浚はれたのだから、幸にしてお絹は歸つて來たからいゝやうなものゝ、若し歸らなければ、所詮自分の腹切勝負だと思ひました。トテも此處に斯うしてはゐられぬ、面目のない事だと思ひました。米友は、それ故に良心の呵責を受けてゐます。併し、米友の單純な心でも、如何もあれからのお絹の擧動が解せない。他の人が騒ぐほどに騒がないお絹の心持がわかりません。髪容や着物の散々になつて歸つて來た處を見れば、可なりヒドイ目に遭つて來たのだらうと思はれるにも拘はらず、そのヒドイ目に遭はした奴に仕返しをしてやらうといふ氣が更に見えない。仕返しをして見やうといふ氣が無いばかりではなく、其の爲に山狩をして惡い奴を捉まへやうとするのを餘計なことのやうに見てゐます。

それよりも尙ほわからないのは昨夜あれほどに人騷がせをやつた當人であるに拘はらず、今日はもうケロリとしてしまつて、甲府から迎へに來たといふお武士を引張上げて、あの通り御機嫌よく持てなしてゐるといふ事が正直な米友に取つては忌々しいことです。

あんな取り止まりのない人間を、槍を持つて番人に廻つてゐるのが馬鹿々々しいと考へてゐる時に、障子が不意に開きました。見れば

やゝ酒氣を帶びたお紺が其處に立つて、

『友さん』

『うむ』

『昨夜はどうもお騷がせをしました、あの甲府から神尾の殿樣がお迎へにお出で下すつて、お供の衆も澤山ついてゐますから、もうこれからは安心、今までお前さんにも色々お世話になりましたけれどこれからはもうお前さんの勝手に旅をして宜うございますよ』

『えゝ』

『お前さんは、これから江戸の方へ歸りなさるとも、また甲府の方へ行つて見やうとも、もうわたし達に拘はないで、自分の氣儘にしてお出でなさい』

『うむ』

『これは少しだけれど、ほんの、わたし達の志、どうぞ納めて置いて下さい、それから若しお前さんが甲府へ行つても、今までの調子で心安立に殿樣のお邸なんぞへ無暗にやつて來られては困ることもあるから其處は遠慮をして置いてお呉れ、そのうち御緣があればまた何とかして上げないものでもありませんからね』

金二封を包んで其處に置いたまゝ眼をパチ〳〵させて口を吃らせて

米友を見返りもしないで、お絹はさつさと此の塲を立つて行きました。

お絹の置いて行つた金一封を前にして米友は暫らく呆然としてゐたが、やがて冷笑に變つてしまひました。

『馬鹿にしてやがら』

その一封を横の方から突いて見ました。突いて見たのは何も、その中にドノ位入つてゐるかといふのを試したわけではありません。あんまり馬鹿々々しいから、小突廻して見たのであります。

米友は、これ等の連中の譜代の家來でもなければ臨時の雇人でもない。甲州へ行かうといふのは、必ずしも此の人の附添が目的なのではないのです。これは行きがけの駄賃のやうなもので、米友はお君に會ひたくて堪らないから其れで甲州へ行く氣になつたものであります。

この附添は頼んだものではなくて頼まれたものである。何時斷られた處で敢て痛痒を感ずるわけではないけれど、此處で斷るといふのは、あんまり人を馬鹿にした仕打であると思ひました。それだから米友は、

『勝手にしやがれ』

と云つて、また其の金一封を小突廻しました。金一封を小突廻した處で初まらないのであるが、この塲合米友の癇癪のやり塲としてはどうしても眼の前の金一封が的になります。

『馬鹿にしてやがら、こんな金なんぞ要らねえ』

米友は一旦、左の方から小突廻した金一封を今度は右の方から小突廻しました。その有樣は摑んで拋り出すのも汚らはしいと云つた手

つきであります。

よし／＼、これからは一本立で甲府へ行つて見せるとも。峠を越せば甲府まで一日で行けるといふ事だ。小道だつて何もその位の事に困りはしない、こんな金なんぞ要るものか、突返しに行くのも、あの女の面を見るのが癪だから、と云つて置き放しにして行けば誰か取つてしまつた時に米友が持つて出たと思はれるのが業腹だと米友は、眼の前の金一封を睨めながら、腹を立てたり始末に困つたりしてゐましたが、結局庭へ抛り出してしまうのが一番宜しいと考へました。庭へ抛り出して撒き散らかして置けば、人の目に觸れて自分が持つて出なかつた證據が立つと思ひました。

米友は其の金一封を掴んで、ゲヂゲヂでも取つて捨てるやうな手つきで持ち出して、障子を明けてポンと庭の方へ、それもお絹の部屋

の方へ近く、成るたけ人の眼に觸れるやうな處へと思つて投げ出しました。

米友に投げられた金一封は、庭の松の木の幹に當つてコツンと音がしましたけれど、可成り固く封がしてあつたと見えて、そのまゝ轉がつてしまつたから、到底、梅忠がやつたやうな花々しい光景にはなりません。

『ちえッ』

米友は舌打をして其の抛り出した金一封を尻目にかけながら、自分は手荷物と例の手槍と脚絆なんぞを掻き集めて旅の仕度に取りかゝります。

旅の支度が出來上つて、いざと米友は縁へ出ましたけれど今投げ出した金一封が、封のまゝでゴロリと其處に轉がつてゐるのが眼ざわ

りで堪りません。
米友の氣象として、決して其の金一封に未練があるの何のといふのではないけれど、あゝして置いて誰にも見られないで他の人に拾はれてしまつては、結局やはり、自分が持つて逃げたやうに思はれてしまうのが心外であるから、松の根方に轉がつてゐる金一封を暫らくながめてゐましたが、そのうち、

『左樣だ〳〵、お暇乞の印に彼奴の座敷へ此れを抛り込んでやれ』

何か思案がついたと見えて、庭へ飛び下りて、その金一封を拾ひ取るや米友は覘ひを定めて、それをお絹の座敷へ障子越しに投げ込みました。

その時に、お絹の座敷にはお絹がゐませんでした。お松がひとりで机によりかゝつて本陣で貸して呉れた本を讀んでゐました。

そこへ怖ろしい音がして、障子を突き破つて丁度白鳥の如く飛んでゐる繪本の上へ重い物が落ちて來たからお松は吃驚しました。もう！」

で自分の眉間へ當る處であつた。誰が此んな惡戯をしたのであらう、と、お松は急いで其の破れた障子を開けて見ました。

障子を開けて見ると、米友が今丸くなつて植込の中を向ふへ逃げて行く姿が見えましたから、お松は何の事だか譯がわからずに、

『友さん、友さん、今こゝへ石を投げたのはお前かへ』

と云つて廊下を追ひかけるやうにして見ましたけれど、米友は返事もしなければ、振り返りもしないで、例の足どりで逃げて行つてしまひます。お松はいよ〳〵事情がわからないけれど、米友はすつかり旅の裝ひをして逃げて行くから、兎も角も、つかまへて容子を聞いて見なければならないと思ひました。米友は氣が短くつて怒りつ

ぼいし、それに時々感違ひをして怒り出す癖があるから、これも何か氣に入らない事があつて逃げ出すのだらうと想つたから、呼び留めて事情を聞いた上で、理解してやりさへすれば直に納まるものと、大急ぎで廊下を駈けて有合せの草履を突かけて米友を追かけました。

表から逃げないで裏の方の隅川へ沿うた處の細い道を逃げて行く米友を、お松は追ひかけながら、

『友さん、どうしたのです、さう無暗に逃げてしまつては事情がわからないじやありませんか、少し待つて下さい、事情を話して下さい、わたし達を置いてけ放りにして逃げてしまふのは酷いじやありませんか、少し待つて下さいよ、ね、友さん』

お松が斯う云つて呼びかけた聲の聞こえない筈はありませんのに米友は後をも振り返らず、いよ〳〵一生懸命で逃げて行きました。

『友さん、事情がわかりさへすれば、お前の出て行くのを留めはしませんから、ちよつと待つて話をして行つて下さい、ね、友さん、何が氣に入らないの、わたしは此んなに疲れてしまつた、これほどにしてお前を追ひかけて來たのにお前が聞かない振をして行つてしまへば、若し甲府へ着いた時に君ちやんの在所がわかつても、お前には知らせて上げないよ』

お松は駈けながら息を切つて、斯う云ふと、この遠矢が幾分か米友に利いたと見えて米友は急に立ち止まり、

『お松さん、お松さん、俺等は此れから一人で甲府へ行くんだ、俺等が如何いふわけで一人で甲府へ行くやうになつたのか、今投げてやつた包み物に聞いて見るがいゝや、お前さんには何も恨み戀は無

えんだ、甲府へ行つたらお目にかゝりませうよ』

米友は後を振り返つて、お松に向つて大きな聲で返事をしました。

『そんな事を云はないで』

お松が押し返して云ふと、

『今まではお前さん達と仲よくして來たけれど、これからは他人なんだ』

米友は頑として首を振ると共にクルリと脊を向けてしまひました。

米友は遂に留まりませんでした。お松は再び追ひかける氣力が無いので、米友の姿が山の中へ隱れてしまつた時分に本陣へ歸つて來ました。

お松は元の座敷へ歸つて來て、米友の言ひ殘して行つた言葉、今投げてやつた包に物を聞いて見るがいゝと云つたことを思ひ出したから、机の上に置いてあつたあの紙包みを取つて見ると、それは若干かの金の包みであります。

聰明なお松は早くも、それと合點をしました。お師匠樣のお絹が、この金を米友に與へて暇を出してしまつたものだらうと感づいた事であります。役に立つても立たなくても一緒に此處まで來たものをもう目的地まで一息といふ處で暇を出すのは、人情に叶つた仕打ではないとお松は恥しい思ひをしました。師匠樣のお絹といふ人は其の位の事を仕兼ねない人、成程、神尾の殿樣や其の家來衆が迎へに來て呉れて見れば米友に附添を頼む必要は無くなつてしまつたかも知れないけれど、此處でもう用は無いからと云つて金包を出されたら大抵の人は氣を惡くするに違ひないと思ひました。

況してやあの氣の短い米友が怒り出して、この金包を叩きつけて逃

げるといふ事に、お松は却て氣の毒に堪へないのであります。

そこへ、お絹が見えたから、お松は米友が投げて行つた金包を出して事情を話して見ると、お絹は、

『それほど粗末になるお金なら返して貰ひませう、わたしに遣はせれば幾らでも遣ひ道があるから』

と云つて、恬として其の金包を再び自分の手に納めた上で、

『ほんとに、素直に出て行つて呉れて宜かつた、何かの力になるかと思つて頼んで見たら、力になる處か、却て世話ばかり燒かせてしまつて、この後、どんな間違ひを起すか知れたものではない、今のうちに出て行つて呉たから助かつたやうなものさ』

お絹は斯う云つて、その金を懐中へ入れてまた神尾主膳の居間の方へと出て行きました。

それと同時に、お松は俄と我身に頼りなさの心が湧いて來るのを禁めることが出來ません。

大菩薩峠（駒井能登守の卷終）

大菩薩峠

（白骨の女神の巻）

中里介山著

一

これより先き、龍王の鼻から宇津木兵馬に助けられたお君は兵馬戀しさの思ひで物に魅かれたやうに病み上りの身をさへ忘れて、兵馬の後を追ふて行きました。

よし、その言ひ置いた通り白根の山ふところに入つたにしろ、其處でお君が兵馬に會へやうとは思はれず、況んや、其の道は、險山峨峨として鳥も通はぬ處がある。何の用意も計畫も無くて分け入らうとするお君は無分別であります。

ムク犬は悄々として跟いて行きました。其の樣、恰も主人の、物狂

はしい擧動を歎くかのやうであります。
丸山の難所にかゝつた時分に日が暮れると共に、張りつめたお君の氣がドッと折れました。
『ムクや、もう疲れてしまつて歩けない』
杉の木の下へ倒れると、ムクも其の傍に足を折つて身を横へました。
ムク犬が烈しく吠え出したのは其の曉方の事でありました。お君は其のムク犬の烈しい吠え聲にさへ破られないほどに昏酔狀態の夢を結んでゐたのであります。
ムクの吠える聲は、快く眠つてゐるお君の耳には入りませんでしたけれど、幸に其處を通り合せた馬商人の耳に入りました。
まだ若い丈夫さうな馬商人は小馬を三頭引ぱつて奈良田の方から此

處へ來かゝりましたが、此の曉方、この人足の絶えた處で、犬の連りに吠えるのが氣になります。
『おや〳〵、この娘さんが危ない、こりや病氣上りで無理な旅をしたものだ』
この若い馬商人は心得てお君の身體を揉み、懷中から藥などを出してお君に含ませ
『おい姉さん、確かりしなさいよ、眠ると可かんよ、眠らんで眼を大きく明て居らなくては可かんよ、わしは此れから有野村の馬大盡へ行くのだが……』
程なくお君は此の馬商人に助けられ馬に乘せられて有野村の馬大盡といふのまで連れて來られました。
馬大盡の家の前まで來て見るとお君は其の家屋敷の宏大なのに驚か

ないわけには行きません。

甲州一番の百姓は米村八右衛門といふので、それが四千五百石打こいふことであります。和泉作といふのは東郡内で千石の田畑を持つてゐるといふ事であります。この馬大盡はもつと昔からの大盡でありました。

甲州の上古は馬の名産地であります。聖德太子の愛馬が出たといふ處から黒駒の名がある。その他鳳凰山駒ケ嶽あたりも馬の産地から起つた名であります。御勅使川の北の方には駒塲村といふのがあります。この有野村は、元「馬相野」と云つたものださうです。お君が來て見た時、屋敷の近い處にある廣い原ッぱや、眼に觸れた處の厩を見てもちよつとには數へきれないほどの馬がゐました。成程これは馬大盡に違ひないと思ひました。

それのみか、門を入つてから丸で森の中へ入つて行くやうに何千年何百年といふやうな立木であります。

『一品式部卿葛原親王様の時分からの馬大盡だ』

と馬商人がお君に云つて聞かせたゞけのものはあります。

屋敷の中を流れる小流に架けた橋を渡つてしまつた時分に木の陰から現はれた女の人が

『幸内、幸内』

と呼びました。若い馬商人は、

『はい』

と云つて女の人を見てあはてたやうでありました。

馬上のお君も亦其の聲を聞いて其の人を一眼見るとゾッとしてしまひました。妙齢の面といふ面は殘らず燒け爛れてゐるのに、白い眼

がピンと上へ引釣つて口は裂いたやうに深く強く結ばせてゐるから世の常の醜女に見るやうな間の抜けた醜さではなくて、斷へず一種の怒氣を含んでゐる物凄い形相です。一層慘酷なのは此の妙齡の女の呪はれたのが、たゝ其の顏面だけにとゞまるといふ事です。着けてゐる衣裳は大名の姫君にも似るべきほどの結構なものでありました。罪の深い惡病のいたづらか、その髮の毛だけを天性のまゝに殘して置いて漆の垂れるやうに黑く、それを美事な高島田に結上げてありました。姿、形、作り、氣品、その顏だけを除いて、若し後向きにしてこれをながめた時には、誰でも恍とりしてながめるほどの美人です。

馬に乘つてゐたお君は其れを突然に前から見てしまひましたから、ゾッとして慄え上がりました。

『幸內、お前、今山から歸つたの』

その呪はれた妙齡の人は椿の花の一枝を手に持つてゐました。さうして若い馬商人を幸內、幸內と呼びかけては此方へ靜かに近寄つて來るのであります。

『これはお孃樣、お早うございまする』

幸內と呼ばれた若い馬商人は小腰を屈めました。

『幸內、それは何處のお方』

と云つて呪はれた女の人は、其の引釣れた眼を銀の針のやうに光らせて馬上のお君を見ました。その時に、お君は身の毛が立つて馬の上にも居堪らないやうな氣がしました。

無論、この時までもムク犬は默々として馬と人とに從つて跟いて來てゐたものですが、此處に至つてその鷹揚な頭を振上げて呪はれた

妙齢の女の人の面を凝と見つめました。

『これは、丸山の下で、難儀をしておゐでなさる處を助けて上げたのでございます、まだ身體が弱つておゐでなさるやうでございますから、女中部屋まで連れて行つて休ませて上げたいと思ひます』

『さう、早くさうしておやり、お藥が要るならわたしの處まで取りにおいで』

『はい、有難うございます』

お君は馬上で聞いて此のお嬢樣と呼ばれる人が面付の怖ろしいのに似もやらず、情深い人のやうに思はれたのでホッと一安心です。

『それから幸内や、その馬を厩へ廻してしまつたら、父樣の處へ行く前に、わたしの處へ、ちよつとお出で』

『はい』

『嘘を云つてはなりませんよ』

お嬢樣は斯う云つて椿の花の枝を持つたまゝで彼方へ行つてしまひました。嘘を云つてはなりませんよ、の一言に針が含まれてゐるやうに、お君の耳には聞きなされます、併し乍ら、お君の胸は、

『お可哀相に……』

といふ同情が無暗に湧いて來て、その呪はれたお嬢樣の爲に、殆ど泣たくなつてしまひました。

二

お君は若い馬商人の幸内に引合はされて、女中の取締りをしてゐるお婆さんに會ひました。このお婆さんは幸内から委細の物語を聞い

た上で、

『まづい物を食べて皆んなの女中と同じやうに働いてもらひさへすれば、何時までゐても惡いとは申しません』

差しあたり、斯う云はれた事はお君に取つて仕合せでありました。女中は皆んなで十五人ほどゐました。その女中のうちにも自から甲乙があつて、本人の柄によつて奥向きのと下働きのと二つに分れて居ます。

『わたしは、骨の折れるやうな力業は出來ませんけれど、どうかお臺所の方へ廻していたゞきたうございます』

とお君は却て下働きを志願しました。

お君が好んで下働きを志願したのはムクが居るからであります。若し奥向を働くやうになつて、ムクと離れる機會が多くなると、ムクの世話を人手にかけるのが氣にかゝる。少しは骨が折れても、朝夕ムクと同じ處に居る事がドノ位力になるか知れません。お君の仕事と云つては、普通の臺所の仕事の外には馬にやる豆を煮たり鷄の餌をこしらへてやつたりする手つだいで太して骨の折れるやうな事はありません。初めのうちは自分が厄介になる上に犬まで伴れて

と氣兼をしてゐましたけれど、これほどの大家で犬一匹が問題にもならず、心安く思つてゐるうちに、ムクは早くも他の女中達に可愛がられてしまひました。女中取締のお婆あさんも亦ムクを男らしい犬だと云つて大變可愛がるやうになりました。

從來此の家にゐた幾多の犬も、ムクの姿を見た最初は吠たり睨んだりして見ましたけれど二三日經つうちに不思議に懐いてしまひ、ムクが立つと、群犬が其の周圍に自から列を作るやうになりました。

ムクが牧場を目がけて歩を運び出すと、群犬が其れに從つて足並を揃へて繰出すやうになりました。

廣々とした牧場、その中に逞しい馬や、愛らしい小馬の臥たり起きたり鬣を振つたりしてゐる中をムクが群犬の一隊を引つれて一周する光景は勇ましいものでありました。お君は手拭をかぶつて小流れの岸で、他の女中達と一緒に野菜を洗ひながら、ムクの勇ましいのを見て自分ながら嬉しくて堪まりませんでした。

『こんな威勢のいゝ處を友さんに見せてやれば、ドノ位喜ぶか知れない、友さんもあんな處に燻つてゐるよりは、こんなお家へ奉公してお馬の番人にでもなればいゝに』

とお君はムクの勇ましさから、米友の身の上を考へました。

それを考へ出すと、一體此處の旦那樣といふ方が、どんなお方であらうかといふ事をも考へ及ぼさないわけには行きません、朋輩の女中に向つて

『お藤さん、御當家の旦那樣は何方に居らつしやるのでございます』

『旦那樣御夫婦のおゐでなさる處は向ふの屋根の大きなお家さ、その向ふに破風の處だけ見えるのが三郎樣のおゐでなさる處で、こゝでは見えないけれど、あの欅の木のこんもりとした中にお嬢樣のお家があるのですよ』

『お嬢樣の……』

お君にはこゝで前の日に小橋のほとりで會つた彼の呪はれた妙齡の女の姿が一圓に迫つて來ました。

『お君さん、お前はお嬢樣に會ひましたか、まだですか』

『いゝえ……』

とお君は首を横に振つてしまひました。

「さうですか」

と云つたきりで、お藤は氣の抜けたやうな面をしてお君を見ました。

お君はこの場合、お嬢樣の身の上の事を尋ねるのだが、何だか其れは忍びない心持がしたから、取つて附けたやうに、

「まだ、私は旦那樣にもお目にかゝりません」

「旦那樣は、滅多に外へおゐでになりませんけれど、どうかすると此の牧場へお伴を連れて出ておゐでになさることがありますよ」

「お年はお幾つ位でございます」

「もう、いゝお年でせうよ、あの三郎樣や、お嬢樣の親御さんですから」

「三郎樣と仰有るのは」

「こちらの總領のお方、この馬大壺のお後を取る方なのよ」

「それから奥樣は」

「奥樣には、わたしまだお目にかゝつた事がありません」

と女中のお藤が云ひました。

その家の女中でゐて奥樣を知らないといふ事はお君の耳には奇異に聞えました。

「わたしが奥樣のお面を知らないばかりでなく、家の女中で、誰でもまだ奥樣にお目にかゝつた者は無いのですよ、取締のお婆さんだつて、奥樣を知つてゐるか知つてゐないか、あのお婆さんだけは知つてゐるには知つてゐるでせうけれど、それも知らないやうな面をしてゐますよ」

「それは如何いふわけなのでございます、奥樣は御別宅の方にでも

居らつしやるのですか』

『如何いふわけだか、ほんとに、さう申しては何ですけれど變なお屋敷でございますよ、奥様は此方におゐでなさるともいひ、また御別宅の方におゐでなさるともいふのですが、その邊が永年御奉公をしてゐて、わたし達には、さつぱり解りませんの、けれども今の奥様が二度目の奥様で、旦那様よりズツトお若い方だなんて、女中達の中では噂をしてゐるものもあります、何でも二度目か三度目の奥様に違ひないので、あの三郎様やお嬢様の產のお母さんではないのですね、何だか變に、こんがらかつてゐて、到底、こんな大家の財產と内幕は、わたし達の頭では算當が附きません、たゞ可哀相なのは、あのお嬢様でございますね、あのお方は本當に可哀相なお方でございますよ』

『お嬢様が……』

どうしても話は例のお嬢様の處へ落ちて行かなければならなくなりました。

お君が知らないと思つて、此の女中はお嬢様の事に就ては可なり委しくお君に話して聞かせました。お嬢様の名はお銀様といふ事。それは〳〵怖ろしいお面、といふ時にお藤自身もゾツとして四邊を見廻し、お君もあの時の面が眼の前へ現はれて身の毛が竪ちました。なほ此の女の語る處によれば、お嬢様のあんなお面になつたのは、たゞに疱瘡の爲ばかりではない、それより前に大きな火傷をしたのがあゝなつたのだといふ事でありました。誰かお嬢様にあんな火傷をさせた者があるのだといふやうな口ぶりでありました。

して見れば、天然の病氣と人間の手と二箇がゝりで、あのお嬢様と

いふ人の面を蹂躙してしまつた事になる。何といふ慘たらしい報ゐであらうと、お君は、どうしても其のお嬢樣の爲に心から同情しないわけには行きませんでした。

「これほどのお大盡でも、あればかりは如何することも出來ませんね、それだからお君さんのやうな容貌よしに生れついた者はお金で買へない幸福を持つてゐるわけですから、大切にしなくては可けませんよ」

とお藤はお君に向つて斯う云ひました。野菜類を洗つてしまつてからお君はムクに食物をやらうとしました。

處が、何時も其の時刻には來てゐるムクが見えませんから、お君は牧場へ出て遠く眼の届く限りを見渡しました。併しそこにもムクの姿が見られません。思ふに群犬を率ゐて興に乘じて、あの山の後の

方まで遠征して行つたものだらうと、お君は強いては心配しませんでした。

此の機會に少し牧場の狀態でも見て置かうかと、お君はムクを尋ねながらに牧場の方へと歩んで行きました。

今、お君の頭の中では、ムクの事よりも一層あのお嬢樣の事が考へられて堪りませんでした。

お君は自分ほど不幸なものは此世に無いと思つてゐた一人でした。ほとんど幸福といふものを持たずに生れて、不幸といふ浪の中にのみ揉まれて來たのが自分の此れまでの生涯だと思ひました。それを今、あのお嬢樣と比べて見れば、自分の方が確かに幸福者であると云はれて、成程さうかと思はねばならない事ほど無慘に感じたのであります。

病氣をした事の無い者には壯健で無事でゐる事の有難味がわからない。兎も角も、人並に生れついたといふ事の有難味が、この時お君にわかつて來て、自分ほど不幸な者は此の世にないと思つてゐた心は、僻みであつたり我儘であつたりしたのではないかとさへ思はれました。百萬長者の娘に生れたことが、この時にはお君に取つて少しも羨望ではありませんでした。さうして此の氣の毒なお孃樣の身の上に心の中で同情をしながら牧場を歩いて行くうちに、つい〳〵お孃樣のお家のある處だといふ欅の林に近い處迄來て了ひました。もう冬と云つても宜い位ですから欅の紅葉は、ほとんど八ッ ケ岳颪で吹き拂はれてゐました。木の下には黑くなつた落葉が堆く落ちてゐました。そこへ來てお君は、こゝがあのお孃樣のお家であると思つて、そつと大きな欅の蔭から垣根の中をのぞいて見ました。

そこにまた庭があつて、池や泉水や築山があるのが見えました。さうして椽の處に一人の男の人が腰をかけてゐる容子であります。

『幸內、幸內』

と座敷で呼ぶのは、あのお孃樣の聲、呼ばれて、椽に腰をかけてゐるのは、自分を助けて來て呉れた若い馬商人、お孃樣の方の姿は座敷の中にゐて見えませんけれど、幸內の姿は垣根越によく見ることが出來ました。

『幸內や、お前に貸して上げるには上げるけれど、お父樣に話しては可けません』

『如何致しまして、旦那樣のお耳に入りますれば、お孃樣よりは、わたしが如何に叱られるか知れません』

『では大事に持つてお出で、さうして三日經つたらきつと返して呉

れるだらうね』
『それは最早間違ひはございません』
『刀や脇差は幾本も幾本もあるのだけれど、此の一腰はお父様がわけても大事にしておゐでなのだから』
『それは、もう宜く存じて居ります、三日經てば間違ひなくお返し申しまする』
幸内の前へお銀様は手づから長い桐の箱をさし置きました。
『これは如何も有難う存じます、お嬢様のお蔭で日頃の望みが叶ひまして、此んな嬉しいことはございませぬ』
幸内は箱の上へお辭儀をしました。
『幸内』
『はい』

『お前が此の間連れて來た、あの娘は如何してゐます』
『へい、あれはおばさんに願つてお屋敷へ御奉公を致すやうになりました』
『あれはお前、お前が前から知つてゐた子ではないの』
『いゝえ、そんな事はございませぬ』
『では、あの山で初めて會つたのかい』
『左様でございます』
『その後、お前はあの娘と口を利きましたか』
『いゝえ、あれからまだ會ひませんでございます』
『あの娘は容貌が美い子でしたね』
『如何でございましたか』
『あんな事を言つてゐる、あの娘は綺麗な子であつたわいな

『面つきは、そんなでございましたか知ら、何しろ行き倒れのやうな姿でございましたから見る蔭はありませんでした』

『姿はやつれてゐたけれど、ほんに容貌美し、よく作つてやりたい』

『一寸見は美く見えても作つて見ると駄目なんでございませう』

『いゝえ、拘はないで置いてあの位だからお作りをしたら、どの位美くなるか知れない、わたしは着物も持つてゐる、髪の飾も持つてゐる、貸してやりたい』

『お嬢様のそのお言葉をお聞かせ申したら定めて有難く思ふことでございませう、あの娘はほんの着の身、着のまゝで道に倒れてゐたのでございますから』

『わたしの物を、そつくり遣つてしまひたい、わたしなんぞこそ着の身、着のまゝでいゝのだから』

『お嬢様、何を仰有います』

『はゝゝ、わたしとした事か、また我儘な事を云つてしまひましたし、幸内や、それで宜いからお前は早く其れを持つてお出で。誰かに見られると悪いから、見られても構はないけれど』

『それではお嬢様、お借申して参りまする、三日目には必ず持つて参りますでございます』

幸内は頭を下げて其長い桐の箱を風呂敷に包んで暇乞をしました。

『お前、歸りがけに、あの娘の處へ行つて、あの娘に、わたしの處へ遊びに來るやうに、と云つてお呉れ』

『はい、畏まりました』

さう云つて幸内は長い桐の箱を小脇にして椽側を離れました。その桐の箱の中には此のお嬢様の父なる人の祕藏の刀が入つてゐるとい

ふ事が話の模様で推察されます。
お君が女中部屋へ歸つて針仕事をしてゐる時分に、ポツリ〳〵と雨が降り出して來ました、
「今日は」
内にゐたお君は其れが幸内の聲であることを直に覺りました。實はもう少し早く幸内がお嬢樣の言傳を持つて來るだらうと、心待ちにしてゐないわけでもありませんでした。
「誰方」
それと知りつゝもお君は障子を明けると、
「私」
「これは幸内さん、よくお出でなさいました」
見ると幸内は小薩張した袷に小紋の羽織を引かけて傘をさして小脇

には例の風呂敷包の長い箱をかゝえて、他行きのなりをしてゐました。
「さあ、どうぞお入りなさいまし」
お君は愛想よく迎へました。
「わしはこれから、ちと他へ行かねばなりませぬ、あのお君さん、お嬢樣がお前さんに會ひたいから、手が隙いたら遊びに來るやうにとお言傳でござんすよ」
「お嬢樣から」
「あい」
「畏まりました、有難うございます」
お君は幸内のお使御苦勞にお禮を云ひましたが、幸内は其れだけの言傳をして置いて此處を出かけて行きました。

お君は暫らく幸内の行くあとを見送つてゐますと、

『お君さん』

朋輩女中のお藤が後から呼びかけました。

『お藤さん』

お君はそれを振り返るとお藤は、

『まあ宜かつた事ね、お君さん、お嬢様から招ばれて宜かつた事ね』

『でも、わたし何かお叱りを受るのじやないか知ら』

『そんな事がありますものか、お嬢様はよく〳〵のお氣に入でないと、此方から何か申上げてもお返事もなさらないの、それをお嬢様の方からお招び出しがあるのだから、お君さん、お前はきつとお嬢様のお氣に召した事があるんだよ』

『さうだと宜いけれど、わたしは何かお叱りを受けるんじやないか

と思つて』

『そんな事はありませんよ、わたし達は斯うして永いこと御奉公をしてゐるけれど、まだお嬢様から遊びにお出でとお迎へを受けた者は一人もありませんよ、それだのにお前さんばかり、そんなお沙汰があつたのだから、ほんとうに羨ましい事』

『あの、お嬢様はお氣むづかしい方ではありませんか』

『いゝえ、あれで中々察しがあつて、よく行き届くお方ですけれど好きと嫌ひが大變お強くてゐらつしやる、このお屋敷でも幸内さんの外にはお嬢様のお氣に入といつてはないのですよ』

『幸内さんは、そんなにお嬢様のお氣に入なんですか』

『えゝ、幸内さんの言ふ事ならお嬢様は大抵の事はお聞きなさいます、だから人が幸内さんとお嬢様とおかしいなんぞと蔭口を利きま

すけれど、まさか其んな事は有りやしませんよ』

まだ明けてゐた障子の間から外を見ると、笠をかぶつて包をかゝえた幸内が、丁度いつぞや入つて來た時にお孃樣と合つた小橋の上を渡つて行く後影が見えました。

三

お君はお銀樣の居間へ上りました。

『お前のお國は何處』

『伊勢國でございます』

『伊勢國は何處』

『古市でございます』

『古市と云やるは、あの太神宮のお在りなさる處』

『左樣でございます、太神宮樣のお膝元でございます』

『其處で何をしてゐました』

『あの……』

お君がちよつと返事に困つた處へ不意に庭先へ眞黑な動物が現れました。それはムクでありました。

『ムクや、こんな處へ來ては可けません、こゝはお前の來る處ではありません』

と云つてお君は、お銀樣の手前、ムクの無躾なのを叱りました。

『これはお前の犬なの』

『はい、わたくしの犬なのでございます』

『まあ大きい犬』

『わたしの後を少しも離れないので力になる事もありますが、困つてしまう事もあるのでございます、さあ、早く彼方へ行つておゐで』

『其んなに云はなくても宜い、主人のあとを追うのは當り前だからさうしてお置き』

『それでも、此んな處へ、失禮でございます』

『さうしてお置き』

ムクは許されたともないのに庭先へ坐つてしまひました。

『温和しくしてお居で』

お君も是非なく、その上追ひ立てることをしませんでした。

『このお菓子を食させてお遣り』

『こんな結構なお菓子を、勿體なうございます』

お君は其れを辭退しました。お銀様は別段に强ゐるでもありませんでした。

『今日は雨が降つて淋しいから、お前、その伊勢國の話をして御覽、わたしは何處へも出ることが嫌だから、他の國の事は少しも知らない』

『お嬢様なぞは、お出ましになつて御覽遊ばさずとも御本や何かで御承知でございませうから』

『名所圖繪や何かで、わたしも御參宮の事を知らないではないけれど』

『太神宮様あつての伊勢でございますから、あの通りは大さう賑やかでございます、その賑やかな處で、わたしは暮らして居りました』

『其處で何を商賣に』

『それはあの……』

可哀さうにお君はまた行き詰つてしまひました。

その時温和しく軒下に坐つてゐたムクは何に氣がついたのか頭を上げて外を見ました。築山の向ふの方を暫らく見込んでゐたのが、やがて立ち上がつてのそ〳〵と雨の中を歩いて行きました。それが容子ありげでしたから、お君もお銀樣も共に犬の行く方をながめました。その時に、

『姉樣』

と云つて庭の方から此の塲を覗いたものがありました。

『三郎さん、此處に來ては可けません』

とお銀樣は叱るやうに云ひました。

『それでも』

『お歸りなさい、それにまあ雨の中を笠も被らないで』

お銀樣は呆れて見てゐました、お君はやはり呆れたけれど、これはたゞ見てゐるわけには行きません。其處へ來たのは十歳ばかりの男の子であります。中剃を入ないで髪をがつさうにしてゐました。和かい着物に和かい袖無羽織を着て、さきに姉樣と呼んだ事から見ても、またお銀樣が三郎さんと呼んだ事から見ても、これはお銀樣の弟の三郎樣に違ひないと思ひました。それであるのに誰も附人なしに一人で雨の中を笠も被らないで大人の下駄を穿いて其處へ、

『姉樣』

と云つて入つて來たから、お君は呆れながらも默つて見て居られませんから、

『坊樣』

と立つて抱いてお上げ申さうとするのをお銀樣が抑へて、

『いゝえ、さうしてお置きなさい、三郎さん、お前は此處へ來ては可けないといふのに、ナゼ歸りません』

『だつて』

三郎さんは、やはり雨の中に立つてお銀樣の面を凝つと見てゐました。お君は如何していゝのかわかりませんでした。雨の中に傘なしで立つた三郎さんの面を見ると、色の白い品の良いお子さんで、この大家の血統として申分のないお子さんに見えましたが、たゞ其の頰のあたりが子供にしては肉が落ち過ぎて、それが爲に、もと〳〵人並より大きい眼が、なほ一倍大き〳〵見えるのであります。大きいけれども強い光は無く懶いやうな色で滿ちてゐるから、品はよいけれども、どうも賢い子には見えません。

『此處へ來るとお母樣に叱られますよ』

『でも』

三郎さんは大きな眼をキヨロリとしてお銀樣の方を見てゐて立つて動かうともしません。雨が降りかゝつて頭から面に雫がたら〳〵と流れ、和かい着物がビツショリと濡れてしまつても少しも氣にかけないのであります。それをまたお銀樣は見てゐながら、たゞお歸り〳〵と云ふだけで立つて世話をしてやるでもなければ、お君が立ちかけたのをさへ抑へてしまつた心持が如何してもお君にはわかりません。

『早くお歸りといふに』

お銀樣の權幕は凄くなりました。その釣り上がつた眼の中から憎惡の光が迸しるやうに見えました。たゞ姉が弟を叱るだけの態度ではなくて、眼の前にあることを一刻も許すまじき嫌惡の念から來る

ものゝやうでしたから、お君はいよ〳〵解らなくなつて、ほと〳〵立場に苦しむのでありました。

『姉様、お菓子頂戴』

それでも三郎さんは歸らうとしないで斯う云ひました。その癖、姉の傍へは寄つて來ないで遠くから、いちけるやうに姉の氣色を伺つて矢張雨の中に立つてゐるのでありました。キヨロリとした大きな眼の瞳孔が明けつぱなしになつてしまつてゐるのを見るにつけ、此のお子さんは人並のお子さんではないと云ふ事を思うて、お君はお氣の毒の感に堪へられません。

『可けません』

お銀様はキツパリと斷つてしまひました。

見るに見兼ねたから、お君はお銀様の抑へるのも聞かずに立つて下へ降て來て、三郎さんの傍へ寄り、

『坊様、雨がこんなに降つて居りますから歸りませう、お召物が此んなに濡れてしまひました』

『打捨つてお置きなさい』

お銀様は相變らず怖い面をしてゐます。

『ね、わたしに背負をなさいまし、彼方のお家へ歸りませう』

お君は自分のさして來た傘を廻して、それを片手に持ち三郎様へ背を向けました。

お君が折角親切に背を向けたに拘はらず、三郎様は其の時クルリと向き返つてスタ〳〵と元來た方へ歩き出しました。お君は其のあとから傘を差しかけて送つて行かうとするのをお銀様が、

『其方へ行つてはなりません・其方のお邸へ行つてはなりません』

命令するやうな強い聲で呼び止めましたから、お君は立ち竦みました。

三郎樣は大きな下駄を引ずつて雨の中を笠も被らずに悠々と彼方へ行つてしまひます。

『お前は、まだ知るまいけれど、此家ではお互の屋敷へは滅多に往來をしないやうになつてゐます、あの子は其れを申し聞かされてゐる筈なのに、こんな處へ來たから其れで叱りました』

『はい』

『さあ、お前はお上り、あの犬は如何しました、犬が母屋の方へ行つて惡戯をするやうな事はあるまいね』

『あの犬は惡い事は致しませぬ』

お君は再び元の座に歸りましたけれど、この事から何となく其あたりが白け渡つたやうであります。

お銀樣は折角お君を相手に名所の話などをして興を催されやうとしてゐた時に、三郎樣が來て其の御機嫌を、すつかり損ねてしまつたやうであります。いかに大家とは云ひながら一つ屋敷のうちに親子兄弟別々に家を持つてゐるさへあるに、弟は姉の住居へ行つては惡い、姉は弟を送つて行くことを止めるとは何といふ事だらうとお君は何事もわからないで、たゞ悲しい心になつて氣が深々と滅入やうでしたから、此れではならないと思ひました。

さうして何とかして不快になつたお銀樣の心を慰めて上げたいものだと思ひました。けれども何と云つて慰めて宜いか取り附き場に苦しんでゐましたが、そのうちにお君は床の間に飾つてあつた琴を見て、音曲の話を引き出しました。それは此の場合、お君に取つても

お銀様に取つてもよい見つけものでありました。

『まあ、お前、三味線がやれるの、それは宜かつた、わたしがお琴を調べるから、其れをお前、三味線で合せて御覽』

お銀様は大へんに喜びました。それで今の不快な感じが消えてしまつた容子をお君は初めて嬉しく思ひます。

その雨の日は、夜になつても二人の合奏の興が續きます。

四

神尾主膳は其の後しばらく病氣と稱して引き籠つて居りました。引籠つてゐる間も分別とか山口とかいふ其の同意の組頭や勤番が始終出入してゐました。今日は兼ねて前から企てをして置いた處によつて多くの人が朝から神尾の屋敷へ集まつて來ました。

これは神尾の邸の裏の廣場で「樣物」がある約束でありました。「樣物」は即ち試し斬であります。

朝から神尾邸へ詰めかけて來た連中は、いづれも秘藏の刀や自慢の脇差を持つて集まりました。

あらかじめ罪人の屍骸を貰つて來てあつて、斬手の役は小林といふ劍道の師範役、それに勤番のうちの志願者も手を下ろして利鈍を試むるといふ事であります。

たとへ罪人の屍骸とは云ひながら、人間の身體を試し物に使用するといふことは餘程變つたことであります。併し、この變つた事を日本の古來に於ては立派なる一つの儀式としてありました。

江戸の幕府では腰物奉行から町奉行の手を經て例の山田朝右衛門が

やる事、その時は物々しい檢視場、そこへ腰物奉行だの本阿彌だの徒目付だの、石出帶刀だのといふ連中が來てズラリと並び、斬手の朝右衛門は手代り弟子等と共に麻上下でやつて來て土壇の上や試しの方式には中々の故實を踏んでやる事を、こゝに集まつた勤番連中は、或者は小林に試して貰つたり、或物は自分で試したりして見る事になり、見事に斬つたのもありました。斬り損じて笑ひ物になるのもありました。その度毎に刀の利鈍の評判が出ました。腕の巧拙の評判も出ました。或は刀は良いけれども腕が怪しいと云はれて悄げるもあり、刀はさほどでないが腕の冴えが天晴と云つて賞められるものもありました。

その中でも師範役の小林は、さすがに劍道の達者だけあつて斬方が一番上手でありました。今までに樣物を幾度びもやつた經驗や盜賊

を斬つて捨てた經驗を話して一座を賑はせましたが、一通り樣物も濟んでの上、弟子を連れて辭して歸らうとする時分に神尾主膳がそれを呼び留めました。

『小林氏、お待ち下さい、今日は貴殿に見て戴きたいものがある、貴殿の鑑定並びに並々方の御意見を聞いて置きたい物がある、お暇は取らせぬによつて暫時お待ち下されたい』

『して其の拜見を仰付けられる品は』

『只今持參致させる、いや、もう來さうなものぢや、兼ねて約束して置いた事故、間違は無いけれどまだ見えぬ、追つ付け見えるでござらう、今暫らく』

と云つて神尾は人待顔に見えます。小林師範も神尾が何者を見せて呉れるだらうと坐り込んで待つことになりました。その他一座の連

中も多小の好奇心に誘はれます。

『神尾殿、我々に見せたい品と仰有る其品は』

『先づ、お待ち下され、到着しての上で御披露する』

神尾の言ひぶりが事實を明かさないで置いて、あつと云はせやうといふ趣向のやうにも見えます。其處へ用人が出て來て、

『幸内が參りました、有野村の幸内が推參致しました』

『あ、幸内が來たか、待ち兼ねてゐた、急いでこれへ』

其席へ呼ばれて來たのは有野の馬大盡の雇人の幸内であります。幸内は前にお君の處へお銀様の言傳を云つた足で此方へ來たものと見えます。さうして昨曉は何處か此の甲府の城下へ宿を取つてゐたものでせう。

『これは皆様』

と云つて幸内は遙の下座から平伏しました。こゝに集まつてゐる連中は、皆んな兩刀の者であるのに、幸内ばかりが無腰の平民、然も雇人の身分でありましたから、遠慮に遠慮をして暫らく頭を上げません。幸内の平伏してゐる傍には其の持つて來た長い箱が蒲黄の風呂敷に包んで置かれてありました。

『おゝ、幸内、よく見えた、御列席の方々も皆其の方の來るのを待兼ねじや』

『遲れまして何とも申譯がございませぬ』

『遠慮致さず此れへ出るが宜い』

『左様ならば御免下されませ』

幸内は恐る〳〵出て來ました。

『各〳〵方』

と云つて神尾主膳は一同の方に向き直りながら、

『こゝに見えたのは、これは各方も御存知の事と思はるゝが、有野村の伊太夫の家の雇人じや、あの馬大盡の雇人であるが、民家の雇人に似合ず感心なもので、劍術が中々達者である、村方でも稽古をし、この城下の町道場へも折々通ふ、致つて手筋が宜しい、お見知り置かれ下されたい』

と云つて紹介しました。幸内は、こんなお歴々の方の中へ劍術が達者だの手筋が宜いのと吹聽されたから、さすがに面を赭くしてしまつて、

『恐れ入ましてござりまする』

平伏して、やつぱり頭が上がりません。

『其のやうに恐入らんでも宜い、實は今日は其の方を上客にしたい位、いつもは伊太夫の雇人であるが、今日は位がついて來たのじや、例の品は持つて參つたことであらうな』

『へゝ、恐れ入りまする、折角の殿様のお言葉でござりまする故、主人から借受けて參りましてござりまする』

『それは大儀々々、よく借受けて來た、伊太夫は變人の事でもあり殊にあの品は滅多に人に見せぬ品であるそうな、其の方の働きで、こゝまで持參して來たのは何よりのこと』

『これが其の品でござりまする』

幸内は、やはり恐る〳〵萠黄包の長い箱を差し出しました。

この箱は、前の日、幸内がお銀様から三日の約束で借受けて來た箱であります。この席へ持つて出る爲に幸内は此の箱をお嬢様から借受けたのだといふ事がわかります。

『おゝ、それ〳〵』

と云つて神尾主膳は其箱を受取りながら、

『各方に、この品をお目にかけたい、その前に申上げて置きたい事は、この品はあの有野の馬大盡の家に先祖より傳はる秘寶、御列席のうちにも名のみ聞いて實を見んと思はるゝ向が少からぬ事と推察致す、門外不出とも云ふべき此品を、この席に限りて一見致すことは仕合せ、充分の御鑑定を承はりたいものでござる』

神尾主膳は風呂敷の結び目を解きかけて斯う云ひましたから、列席の者が成程と感心しました。

葛原親王以來と云はれる有野の馬大盡の家には無數の秘寶があるといふ事だが、そのうちにも一本の名刀がある、それは非常な名刀であるといふ評判だけを聞いてゐたがまだ見た者がありません。見やうとしても主人の伊太夫が頑固で容易に見せないとの事でありました。そのうち名刀を今此の席で一見する事が出來るといふのは、一座の好奇心の期待に反かない事であります。

『それは〳〵』

と云つて列席が動搖み渡りました。さすがに神尾殿は苦勞人だけあつて、人を待たし置いて、アッと云はせる趣向が旨いと感じたものもありました。

何か趣向をして置いて、アッと云はせるといふ事は似非茶人や似非通人のよくやりたがることであります。神尾は人を招いた時は、いつでも何かこんな事をしたがるのでありました。さうして、さすがの御趣向だと云はれることを以て大得意になる癖がありましたのです。

併し乍ら、列席の者のうちにはアッと云つたものばかりは有りませんでした。例の忌味な神尾の癖がと苦々しい面をして控えてゐるのもありました。その苦々しい面をして控えてゐる者も、神尾のやり方の忌味なのに苦々しい面をしたので、其の名刀を見たいといふ熱望は決して苦々しいものではありません。辭を厚うし身を謙下つても後學の爲に見て置きたいと思つてゐた處でありましたが、神尾があんまり我物顔に思はせぶりをするものだから、

『如何にも、あの有野の伊太夫が家に名刀があるとは豫て噂に聞いてゐた、噂に聞いた處によれば、源氏の髭切膝丸、平家の小烏丸にも匹敵するほどの名劍であるさうな、併し誰が行つても見せた事はない、見た者も無いといふ、それ故、あの名刀は評判倒れ、實は其れほどでも無い劍を、あんまり評判が高くなつた故に、人に見られ

るのが定まりが惡く、それ故秘して置くといふ蔭口もござる、今日は其れ等の疑ひが殘らず晴れることでござらう、喜ばしい事でござる』

やゝ皮肉まじりに云ひ出でたのは鐵砲方の平野老人でありました。

『まこと此の品が噂通りの名劍であるか、或は左ほどの者でないか御一見の上で各方の腹蔵なき御意見を承はりたい、拙者とても今日はじめて見る品』

神尾は平野老人の言ひ方が少し癪にさわつたやうでありました。併し此の老人は此の席の中での刀の目利でありましたから、多少は警戒しました。萬々が一、この刀が評判ほどのものでないとすれば、眞先に此の老人から槍が出ると思ひましたから、少しは氣味が惡いと見えます。それだから自分はまだ此の刀を見てゐないのだといふ

豫防線を張つて用心をして置きました。さう云つて置けば萬々が一此の刀がそれほどの者で無かつたにしろ、幾分は責任が逃れるし、若し評判通り非常な名劍であつた時には、思ひ入り此の老人から取締めてやらうといふ腹なのでせう。

それですから老人の方でも、また多少の意氣張が出て、眼鏡を拭いて掛け直しました。平野老人につづいては師範役の小林が名を得てゐました。この兩人の外の者と雖も、刀に就ては皆相當の眼を持つてゐないものはありまん。或ひは平野や小林以上に眼の肥えてゐて名の聞えないものが一座の中にゐないとは限りません。

一應アッと云はせたけれども、開けて口惜しき玉手箱では折角の趣向が何にもならぬ。こんな事ならば、一應自分が見て置いてから、此の席へ出した方が宜かつたと神尾は多少自分の輕卒を悔ゆるやうになりつゝ漸く包みを解いてしまつて、箱を開くと古錦襴の袋の中には問題の太刀が一振。

それから神尾が袋を拂つて其の白鞘の刀に手をかけて鄭重に拔いて見ました。

刀身の長さは二尺四寸。神尾主膳が其れを拔いてつくづくと見ると例の平野老人は眼鏡の面をそれに摺りつけるやうにして横の方から見ました。小林文吾も亦其れを前の方からながめて居ました。一座の連中は、或ひは近い處から、或は遠い處から頻りに覗いたり眺めたりしてゐました。主膳はつくづくと見て、

『うむ』

と考へ込んでゐましたが、そのまま何等の意見も述べないで平野老人の手へと渡してやりました。

平野老人は其れを恭しく受けて改めて法式通り熟覽しました。平野老人は打ち返して二度まで見ました。

『うむ』

これも唸るやうに、うむと力を入れて云つたまゝで、次なる師範役の小林文吾の手へと渡してやりました。小林師範が其れを受けて頻りにながめましたけれども、これも一言も意見を述べませんでした。さうして、やはり無言のまゝで次へ渡してしまひました。同じやうにして其の刀が列座の人々の手から手に渡されて、いづれも考へを凝らしてながめてゐましたが、誰とて、それに就て極めをつけて見やうと言ふものは無く、斯うもあらうかといふ意見をさへ述べるものはありません。さうして無言のまゝに受取られて刀は席を一巡し漸く神尾主膳の手にまで戻りました。

『さて如何でござるな、各方』

その刀を鞘へ納めながら神尾主膳は一座を見廻しました。

けれども、誰もまだウンともスンとも云ひませんでした。相州物であらうとか、いゝや備前とお見受け申すとか、大よその見當さへ附ける人がありませんでした。大よその見當を附けてさへ笑はれることを恐れるほどに、わからないのが此の刀でありました。

『區より一體に板目肌が現はれてゐるやうでござるな』

平野老人が漸く此れだけの事を云ひました。相州物とも大和物とも云はないで、肌の事から云ひ出したのは、大綱を述べないで、細論にかゝつたやうなものでありました。この老人も多少手古摺つたものと見えます。

兎も角も平野老人が、これだけの口を開いて見ると、次には小林師

範役が何とか言はなければならない立場になりました。

『模様を一見した處では肌が立つて地鐵が弱いやうにも見受けられる……が』

最後のがといふ處へ、最も多くの餘地を殘して置きました。

『左様』

平野老人は呑込んだやうに頷きました。併し何が左様だか列座の人には、あんまり呑込めないやうでありました。そこで老人は、

『その地鐵がなあ』

と附け足したけれども、地鐵が如何したのだか、いよ〳〵呑込めなくなりました。これだけ言ひかけたら、あとは小林師範役か誰かゞバツを合せて呉れるだらうと思つてゐた處が、小林は其れから何とも云ひませんでした。一座の者も默つてゐましたから、老人は自身

の言葉尻を持ち扱つてゐると列座の中から、

『則重……則重……則重……ではないか』

と吃りながら斯う云つた者がありました。これは粗忽かしいので通つた市川といふ御藏のかゝりでありました。まだ誰も險呑がつて國も云はなければ年代にも觸つて見ないうちに、早くも其の銘を言つてしまつた處は成程粗忽かし屋であり正直者であることがわかりました。

『以ての外』

平野老人は首を振つて肯ひませんでした。市川の云つた事を例ねつける事によつて、自分が持て餘した言葉尻が立て直りました。

『則重ではござらぬ』

平野老人は首を振つたから、粗忽かし屋の市川は一時、面を赤くし

ましたけれど、老人があんまり手厳しく剣つけたものですから反抗の氣味となつて、

『そ、そ、そんならば、そんならば、老人のお目さゝは……』

と云つて反問しました。焦き込むと吃る癖があるから、いつもならば可笑いのであるけれど、誰も笑ひませんで却て、市川に同情するやうな心持で老人の返答を相待つてゐるやうな者さへあります。それは則重と見たものが此の市川一人ではなく、大分同意見の者があるらしいのです。市川と同意見ではあるけれども、まだ左様も言ひ出し兼ねてゐる時に市川が皮切をしたから、我意を得たりと云はぬばかりに、内心で市川に同情してゐるらしい者もあります。

『成程、則重と云ひたい處である、一應は左様云つて見たい處で、市川氏の仰有るのも御無理は無い、大灣れに銑が優れて多く匂の深い處、則重の名作と誰も云つて見たいが、それよりはずんと高尚で且つ古いものじや』

平野老人は斯う云ひました。

『そ、そんならば老人のお目利は』

市川は再び老人に返答を促したけれども老人は頓に返事が出來ないで困しんでゐる容子を小林師範が傍から見て、

『これは近頃の好題目、口に出して云ふては皆々遠慮がある故に入札として見たら如何でござるな、各自の見る處を少しの忌憚なく紙へ書いて、名前を記さずに此れへ集めて見やうではござらぬか』

小林が斯う云ひ出したのは老人にも救ひであり一座も皆同意しました。言ひ出したいけれども恥を掻くといけいと思つて遠慮してゐたものが多いのを、それが名記名票になれば恥は書き捨てになり、

當れば名譽になるのですから、忽ちに多數の同意を得て筆と紙との用意が出來ました。

各筆を取つて紙片に思ふ所を書いて捻つて盆に載せ、二十餘人の者が殘らず投票をしてしまつた後に開票の事になりました。

開票して見ると其の鑑定に大膽を極めたのもあり、小心翼々と疑問を存したのもあつたが、いづれも其れを古刀と見ることには異議はありません。新刀と書いたものは一人もありませんでした。

備中の青江であらうと書いたり、備前の成宗と極めをつけたのもあり、大和物の上作と書いたのもあり、或は飛び離れて天座神息などと記したものもありました。其の觀る處の區々であるだけ其れだけ捉まへ處が少いものと見えましたが、さすがに則重と書いたものが六枚ありました。二枚三枚と適合したのは他にもあつたけれど、六枚揃ふたのは則重だけでありました。

『如何もわからぬ』

開票して見て、いよ〳〵刀の異體が不思議になつてしまひました。則重も亦正宗門下の傑物だが、今こゝに評判に上つてゐるやうな寶物としては物足りないのであります。

『それでは、いよ〳〵則重かな』

一同の面の色に歴々と失望の色が見えまして、それがやゝ輕侮の表情に變つて行くのを見てゐた馬大盡の雇人幸内は堪まらなくなりましたから、

『申上げまする、これは則重ではござりませぬ、數年前、本阿彌樣が主人の家へお立ち寄りになりました時分の御鑑定によりますれば……』

さてこそ、阿彌が引合に出されて來ましたから、一同は言ひ合せたやうに幸内の面を見ました。

本阿彌といふ名前は、兎にも角にも此の塲合重さを成すのでありました。

『本阿彌家の折紙があるならば、あるやうに最初から云つて置くがよい』

と平野老人が呟きました。

『いゝえ、折紙があるのではございませぬ』

と幸内は言譯をしました。

『如何したのじや』

『本阿彌樣は折紙を付けませぬ、手前共の主人も折紙を附ていただく事は嫌ひなのでございまする』

『して、本阿彌が何と云つた』

『本阿彌樣が申しまするには、この刀は伯耆の安綱であらうとの事でございまする』

『ナニ、伯耆の安綱』

『はい』

『はゝあ、伯耆の安綱か』

と云つて、一旦、鞘に納められた太刀が再び鞘から拔け出しました。

『成程』

『成程』

彼等は手から手に渡してつく〴〵ながめました。

『それだから云はぬ事ではない、一見しては地鐵が弱いやうだけれど、よく見てゐると板目が立ち、見れば見るほど刄の中に波が立ち

後世の肌物とは丸で違ふ』

平野老人は得意になりました。宛ら本阿彌を自分の味方に引つけたやうに鼻高々と一座を見廻すと、小林師範役は、

『成程、さう云はれて仔細に見ると地鐵に潤ひがあつて弱いやうな處に深い強味がある、全く拙者共の目の屈かぬも道理』

と云つて伏してしまひました。

『伯耆の安綱といふのは之れか、名にのみ聞いて拜見するは今日が初め』

一座は幾度も〳〵其の刀を見ました、見れば見るほど感心の體でありました。主人役の神尾主膳も得意になつてしまひ、則重と云つた人々さへ、自說の破れた事は悔ゐないで、其の刀に見惚れてしまつてゐました。自然、幸内の肩身も廣くなりました。

『本阿彌樣も、しかと安綱とは仰になりませんで、若し伯耆の安綱でなければ、それと同じやうな、また其れよりも上の作であらうと御鑑定になりましたさうでございます』

『成程』

『斯樣な刀には我々共が極めをつけるは恐れ多いと本阿彌樣が御謙遜になり、主人も亦、極めをつけて戴くことが嫌ひなのでございまして、たゞ寶刀として藏つて置きましたものでございまする』

『成程』

こゝの一座には、安綱を見たものは何れも初めてゞありました。伯耆の安綱は大同年間の名人、その時代は一千年以上を隔てたものです。よし安綱であつても無くても、それと同格或ひは同格以上のものであらば、其れは寶物とするのに充分であります。

見直してゐるうちに、一座は誰とて其れに不服を唱へるものはありませんでした。

『攝州多田院の寶物に童子切といふのがあるさうじや、これは源頼光が大江山で酒呑童子を斬つた名刀、その刀が即ち伯耆の安綱作といふ事だが、拙者まだ拜見を致さぬ、その他、大名のうちに、稀には安綱があるとも承はつたけれど、何れも其名を聞くばかり』と云つて平野老人は、再び手許に戻つて來た名刀を貪り見ると、神尾主膳も亦老人と額を突き合せるやうにして刀ばかりを見てゐました。

五

その席はそれで濟みました。主人も客も始めあり終りある會合を滿足して退散しました。

たゞ此處で變な事が一つ起りました。それは幸内の行方であります。幸内は彼から御馳走になつて神尾家を辭したのは夕方の事でありました。無論その歸る時も小腋には伯耆の安綱の箱を抱えて歸つたのでありましたが、其れが有野村へは歸らずに、途中で何處へ行つたか姿が見えなくなつてしまひました。

有野村の馬大盡の家では誰も幸内が此の會合の席まで來たといふことを知つたものはありません。一日や二日歸らないからと云つて、それは例ある事だから誰も不思議とは思ひませんでした。

たゞ一人、心配なのはお銀樣ばかりです。今日で約束した三日の期限が切れるのに、幸内がまだ歸つて來て呉れない事をお銀樣は心配

してゐました。三日の期限が切れたから、直にお父様に咎められるといふわけではないけれど、あの刀は秘蔵の刀である故に、心配になります。

それでも、幸内を信じたお銀様は、やがて幸内が持つて歸ることゝ信じてゐました。

けれども其の三日も過ぎて終つた其の夜も遂に幸内が歸りませんでした。夜が明けてお銀様は、やゝ強く其の事を心配しはじめた時分に、この屋敷へ馬に乘つて若黨をつれた立派な武士が、不意に音づれて來ました。

その武士が來て案内を乞ふと、有野家の執事といつたやうな老人が先づ騒ぎはじめました。

『御支配様がお出でになつた』

その騒ぎがお銀様の部屋までも聞えると、

『御支配様がお見えになつたさうな』

とお附のやうになつてゐるお君を顧みてお銀様が云ひました。

『御支配様とは如何なお方でございますか』

とお君が尋ねました。

『それは此の甲府のお城を預かつて、勤番のお侍をお差圖なさるお方』

とお銀様が説明しました。

『それではあの甲府のお城の殿様でございますね』

とお君が受取りました。

『この甲府には大名はないけれど、あの御支配様が同じおつとめをなさいます』